

福岡市埋蔵文化財調査報告書第846集

西新町遺跡8

西新町遺跡第16次調査報告書



2005

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第846集

西新町遺跡8

西新町遺跡第16次調査報告書



調査番号 0322
遺跡名号 NSJ-16

2005

福岡市教育委員会



▲ 2区調査区全景 中央トレンチ、その画面右手がSC-017竪穴住居址。

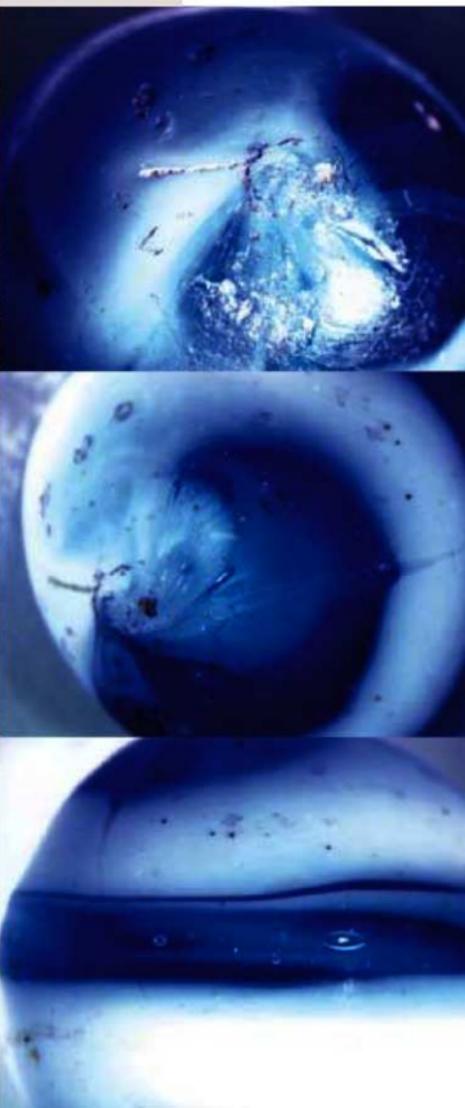


▲トンボ玉の出土状況 住居址内の遺物出土状況図作成後、壺片を取上げた際に青色のガラス製品が見えた。その時点で写真撮影すべきだったが、確認のため被っている砂を払い除けたため、トンボ玉が露出している。但し出土位置は原位置。本文17~19、31、32頁参照

▼トンボ玉透過X線写真
右上写真とほぼ同じ方向で撮影したもの。縮尺はほぼ原寸。上端付近の内部にやや大き目の気泡が確認され、製作時に使用された棒状工具の痕跡と考えられる。



▲西新町遺跡出土のトンボ玉
SC-017出土。ほぼ原寸。直径1.75cmで、孔がない。青白2色のガラスを棒状工具に巻き付け製作。本文17、30、31ページ参照



►トンボ玉の顯微鏡写真

- 上 成形後、棒状工具を抜き取った痕跡を、再加熱し継状工具で閉じた部分。
- 中 紺青透明ガラスの表面からは、数回に亘って巻き付けて成形した様子が観察される。
- 下 玉の側面部分。紺青と白色透明の2色のガラスを巻き付けて成形しており、気泡が横方向に延びている。

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市には、有形・無形の優れた文化財が数多く残されています。これらの文化財は、先人が築き上げてきた福岡の歴史と文化を理解し、今後の福岡市の発展にとって欠くことのできない貴重なものです。本市ではこれを念頭に、昭和48年に福岡市文化財保護条例を制定し、多岐にわたる文化財を保護・活用するよう努めてまいりました。

しかしながら、近年の都市開発などによって市内の歴史的環境は大きく変貌しています。このようにやむを得ず失われる埋蔵文化財について本市教育委員会では、新たな開発に先立ち発掘調査を行い、記録保存しています。

本報告書は、共同住宅の建設に伴い調査を実施した西新町遺跡第16次調査の成果を報告するものです。西新町遺跡は博多湾に面し、学史にも登場する弥生時代から古墳時代にかけての著名な遺跡であります。今回の調査では、漁撈生産に関する遺物などのほか、竪穴住居址から我が国最古のトンボ玉が出土するなど貴重な発見がありました。また、江戸時代中期からこの地区で焼かれた高取焼に関する遺物も出土しています。

今後、本書が文化財への理解と認識を深める一助になると共に、学術研究の資料として国内外で活用していただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、発掘調査から本書の作成にいたるまで、多大なご協力を頂きました大和ハウス工業様をはじめ、調査にご理解を頂きました高取・西新地区の皆様等関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　　言

- 1 本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市早良区高取一丁目105・106・107・108地内において発掘調査を実施した西新町遺跡第16次調査の報告書である。
- 2 調査記録の作成及び整理分担は、次の通りである。
遺構実測・・・・松浦一之介、山口裕平（福岡大学大学院生）
遺物実測・・・・吉留秀敏、松浦一之介、谷直子（九州大学大学院生）、山口裕平
遺構写真撮影・・・・松浦一之介
遺物写真撮影・・・・力武卓治
顕微鏡写真撮影・・・比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）
X線写真撮影・・・比佐陽一郎
遺物復元・・・・木下久美子、田中由紀、宮崎由美子、長浦美美子
金属製品保存処理・・比佐陽一郎
石器石材鑑定・・・・吉留秀敏
製図・・・・松浦一之介、久家春美
写真現像焼付・・・・（有）ダイドーカメラ
本文執筆・・・・松浦一之介
- 3 本書で使用した方位は磁北であり、座標は国土調査法第II系に據る。また、標高は東京湾平均海面高度（T.P.）に據る。
- 4 本書で使用した地図は、大日本帝国陸地測量部発行の「二万分一地形図福岡近傍十一号」及び福岡市発行の福岡市都市計画図を原図としている。
- 5 本書で使用した遺構の略号は、奈良文化財研究所の用例に據る。
- 6 トンボ玉の成分分析は、比佐陽一郎・片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）が行った。また、谷一尚氏（共立女子大学教授）、井上暁子氏（東海大学）、小寺智津子氏（東京大学大学院生）、眞藤洋子氏（中近東文化センター）には多くの御教示を頂いた。また、縄石器について山崎純男氏の御教示を頂いた。記して謝意を表する次第である。
- 7 本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- 8 本書の編集は、松浦一之介が行った。

本文目次

卷頭図版	
序 文	
例 言	
第一章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の組織	1
第二章 遺跡の立地と歴史的環境	2
第三章 調査の記録	4
1 調査の概要	4
2 弥生時代の遺構と遺物	6
(1) 1区の調査	6
1) 竪穴住居址	6
2) その他の遺構と包含層中の遺物	16
(2) 2区の調査	17
1) 竪穴住居址	17
2) その他の遺構と包含層中の遺物	29
3 近世・近代の遺物	29
(1) 高取焼関係遺物	29
4 小 結	30
(1) 検出遺構と出土遺物について	30
(2) SC-017 竪穴住居址出土のトンボ玉	31

図版目次

図 1 周辺遺跡分布図（縮尺1／50,000）	2
図 2 調査区の位置と周辺調査地（縮尺1／5,000）	3
図 3 2区調査区全景（南から）	4
図 4 1区調査区全景（南から）	4
図 5 遺構配置図（縮尺1／150）	5
図 6 SC-001～005実測図（縮尺1／50）	7
図 7 1区遺構出土遺物実測図（縮尺1／4、1／2）	8
図 8 SC-006～009、012実測図（縮尺1／50）	10
図 9 SC-011、013実測図（縮尺1／50、1／20）	12
図10 SC-005検出状況（南から）	12
図11 SC-009検出状況（東から）	12
図12 SC-011遺物出土状況（北から）	12
図13 SC-013検出状況（東から）	12

図14 SC-010 及び遺物出土状況図（縮尺1/50、1/20）	13
図15 SC-010、012検出状況（北から）	13
図16 SC-010遺物出土状況（北から）	13
図17 SC-011～013出土土器実測図（縮尺1/4）	14
図18 弥生土器甕・高壺	14
図19 1区包含層出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）	15
図20 SC-017出土トンボ玉実測図（縮尺1/1）	17
図21 トンボ玉	17
図22 SC-016～018実測図（縮尺1/50）	18
図23 SC-016遺物出土状況（東から）	19
図24 SC-017遺物出土状況（東から）	19
図25 SC-017土器出土状況（北から）	19
図26 SC-017トンボ玉出土状況（北から）	19
図27 SC-018遺物出土状況（北から）	19
図28 SC-018砥石等出土状況（西から）	19
図29 SC-018石錘未製品出土状況（東から）	19
図30 SX-019石錘出土状況（東から）	19
図31 弥生土器蓋	20
図32 SC-016、023、SK-035出土土器実測図（縮尺1/4）	20
図33 SC-017、019、020、022出土土器実測図（縮尺1/4）	21
図34 2区遺構出土石器・鉄器実測図（縮尺1/2）	22
図35 2区遺構及びトレンチ出土石器実測図（縮尺1/2）	23
図36 SC-020、022実測図（縮尺1/50）	24
図37 SC-020遺物出土状況（南から）	24
図38 SC-020砥石出土状況（南から）	24
図39 SC-022砥石出土状況（北から）	24
図40 SC-022砥石出土状況（西から）	24
図41 SC-021、023実測図（縮尺1/50）	26
図42 SC-021検出状況（南から）	26
図43 SC-021石錘出土状況（北から）	26
図44 SC-023検出状況（西から）	26
図45 SC-023遺物出土状況（東から）	26
図46 SC-028、034実測図（縮尺1/50）	27
図47 2区包含層出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）	28
図48 包含層出土高取焼闕連遺物実測図（縮尺1/3）	29
図49 トンボ玉製作工程復元	31

表 目 次

表 1 弥生時代各住居址一覧表	30
表 2 トンボ玉成分分析表	32

第一章 はじめに

1 調査に至る経緯

平成14年9月5日、(株)大和ハウス工業より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課に対して、福岡市早良区高取一丁目105・106・107・108における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを承けて教育委員会埋蔵文化財課では、申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である西新町遺跡に含まれていることから、試掘調査を実施した。この結果、現地表下約110～120cmで近世の遺構面を、更に現地表下約220～250cmで弥生時代の遺構面を確認し、ピット等の遺構を検出した。また、試掘時に弥生土器や砂岩製大型砥石等の遺物を多量に発見した。

この結果に基づいて、申請者と埋蔵文化財課は協議を行ったが、申請地の内、新築部分の423m²については工事に伴い遺構の破壊が回避できないため、その箇所を対象とした記録保存のための本調査を実施することになった。

平成15年5月6日、委託契約を締結し、平成15年5月28日から同年8月12日まで発掘調査を実施した。

調査番号	0322	遺跡番号	NSJ-16
調査地地籍	早良区高取一丁目105他3筆	分布地図番号	72(荒江) A-1
開発面積	423m ²	調査実施面積	348m ²
調査期間	20030528～20030812	事前審査番号	14-2-375

2 調査の組織

調査委託 (株) 大和ハウス工業

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男(前任)

同課調査第1係長 力武卓治(前任) 田中壽夫(現任)

調査庶務 文化財整備課管理係 後藤泰子

試掘担当 埋蔵文化財課事前審査係 久住猛雄

調査担当 埋蔵文化財課調査第1係 松浦一之介

調査作業 梅野眞澄 本田ひろ子 小柳静子 柴藤清志 田中和祐 田中肇 辻節子 辻哲也

徳永洋二郎 永井ゆり子 西川吾郎 西口キミ子 古庄孝子 松本順子 三谷朗子

山口裕平(福岡大学大学院生)

整理作業 木下久美子 田中由紀 長浦美美子 宮崎由美子 谷直子(九州大学大学院生)

尚、発掘作業から報告書作成に至るまで、(株)大和ハウス工業をはじめ地域住民等関係各位には多大な御協力と御理解をいただいた。記して謝意を表する次第である。

第二章 遺跡の地理的・歴史的環境

西新町遺跡は、博多湾に面した早良平野の北部に位置し、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落及び墓地からなる。博多湾岸には第四紀に形成された海の中道砂層、箱崎砂層とよばれる砂丘が発達し、内、鳥飼低地の北の西公園から宝見川右岸には、少なくとも3列の微高地からなる砂丘と砂丘間低地がある。西新町遺跡はこの砂丘のほぼ中央に位置し、後背部には高取山（西畠山・標高29m）、鹿原山（東畠山・標高32m）等の第三紀丘陵がある。また最も海岸側の砂丘以北は、古地図等から江戸時代以前に陸化したことが確認されている。

早良平野では、旧石器時代の遺跡調査例は少ない。縄文時代の遺跡としては、前期から晩期にかけての

四箇遺跡やその北隣の田村遺跡など微高地上に遺跡群を形成し、弥生時代へつながる。

宝見川中流右岸の有田遺跡群では、室帶文期からの環濠が確認された。前期末から中期には、中流右岸の微高地上の遺跡群で遺構数が増加すると共に、吉武遺跡群の形成が始まり、西新町遺跡や姪浜遺跡等の砂丘上にも集落が展開し始める。早良平野の堤防的集落である吉武遺跡群（国指定史跡）では、該期の大型掘立柱建物が検出された。その内、高木・大石地区の墓地群や桶渡埴丘墓等では青銅器や鉄器・装身具など豊富な副葬品が出土している。後期以降は十郎川左岸の台地上に立地する野方遺跡（国指定史跡）で環濠集落が展開し、石棺墓や甕棺墓か

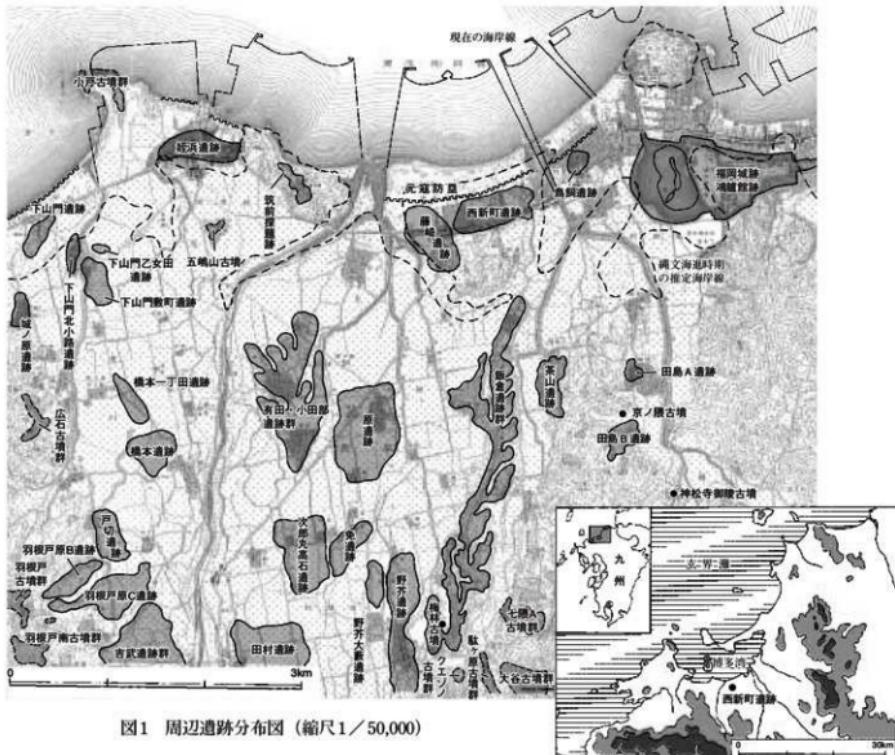


図1 周辺遺跡分布図（縮尺1/50,000）

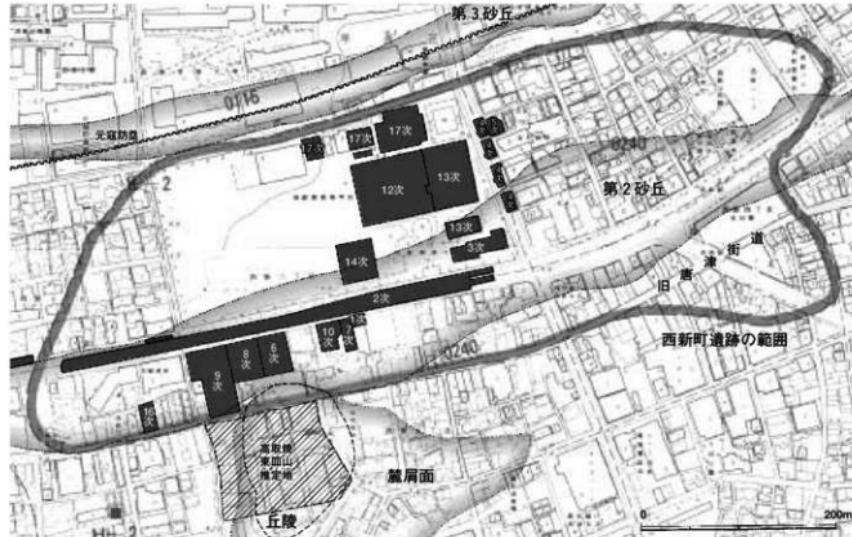


図2 調査区の位置と周辺調査地（縮尺1/5,000）

ら後漢鏡等が出土している。平野東部の七隈川と福塚川に開析された丘陵上に立地する飯倉遺跡でも集落が展開し、小型仿製鏡の鋳型が出土した。

西新町遺跡の西隣、藤崎遺跡では弥生時代前期初頭から古墳時代前期の墓地遺構を多数検出し、周溝墓・石棺墓からは複数の漢式鏡や素環頭太刀等が出土した。姪浜遺跡は愛宕山麓から西に延びる砂丘上に立地し、中期から後期の甕棺墓と古墳時代前期迄の集落からなる。出土遺物には石鍤、製塩土器等の生産関係遺物、南海産の貝製未製品・貝玉、朝鮮半島系無文土器、漢式系三翼鏡等の外来資料が多く、西新町遺跡と類似した様相が窺える。

西新町遺跡では17次にわたる発掘調査が実施された。これまでの成果によると、弥生時代中期中葉から後半の集落は本調査区が西限と考えられ、第6次調査地点迄の東西約150m、龜原山北麓の第2砂丘上に展開している。遺構は竪穴住居址、土壙、土器溜り、溝状遺構等からなり、漁撈貝やその生産関係遺物、板状鉄斧、鐵塊系遺物、朝鮮半島系無文土器、ガラス容器片など特筆すべき遺物が多数出土している。該期の墓群は集落の東側、現在の修猷館高校運動場から国道202号線の南側までの区域に展開し、中でも第10次調査ST-017・018甕棺墓出土

人骨は、その特異な出土状況が議論を醸した。

弥生終末期から古墳時代前期には、第6次調査地点を西限に第5次調査地点にかけて集落が確認され、盛期を迎える。修猷館校舎建替えに伴う福岡県教育委員会の一連の調査では、竈を持つ竪穴住居址が多数検出され、近畿・山陰系や朝鮮半島南部系土器等が多数出土するなど外来系文化の流入が窺え、またガラス玉鋳型や碧玉未製品など生業関連遺物の出土なども特徴的な様相を示している。

これ以後は、奈良時代迄の須恵器が12次調査等で僅かに出土した他、第3次調査の中世墓など遺構・遺物が激減する。文永の役直後、最も海岸よりの砂丘上に石築地（元寇防壁・国指定史跡）が築かれるが、集落としての機能は近世まで断絶する。

元和4年以後、浜は松が植林され、寛永年間には3代藩主黒田光之が西町を植井川左岸に拡げ西の新町、即ち「西新町」の町名となった。東西に唐津街道が通り、北側は後に松原の一部を払い武家地「新屋敷」とした。18世紀初頭、宝永年間には藩窯・東畠山が、次いで享保年間には民窯・西畠山が開窯された。調査地点周辺には江戸後期から明治期の町家、また百道松原の一部が残り、開発が著しい西の副都心にあって当時の面影を僅かに伝えている。

第三章 調査の記録

1 調査の概要

第16次調査地点は早良区高取一丁目105他3筆に位置し、調査前の現況は個人専用住宅解体後の更地であった。立地は砂丘の後背斜面であり、現地表の標高は約5.0mである。耕土処理の都合上、調査は南半分の1区（186 m²）と北半分の2区（162 m²）に分けて行った。調査区は矢板を打ち込み土砂を搬出した為、土層観察できなかった。試掘調査の結果では、現地表下110～120cmで近世の遺構面（明黄色砂層）を、更に180～260cmで弥生時代中期の包含層（暗褐色～暗黃褐色砂層）を検出している。明黄色砂丘面は北側で現地表下約220cm、中央部で下約260cmで検出され弥生時代の遺構面となる。

検出遺構は弥生時代中期中葉から後半にかけての竪穴住居址22棟、土壙1基、ピット、近世以降の井

戸1基、土壙等である。遺構と地山の境界が非常に不鮮明で、検出面を少しづつ下げながら遺構を認定したが、見逃した遺構があると考えられる。住居址と認定した遺構でも柱穴を検出できなかったものがあり、上部構造の想定が不可能なものも含まれる。内訳は20棟が方形で2棟が円形である。

出土遺物は甕を中心に、器台、壺、高环等の弥生中期土器の他、石錘やその未製品、また生産時に出土たと考えられる多量の滑石剝片や砂岩製砥石など漁撈具生産に関係する遺物が多数出土した。また、中期後半の住居址からトンボ玉が1点出土した。

以後、古墳時代から中世までの遺物は確認できなかった。近世から近代の遺物としては、包含層から高取焼やハマ・トチン等の窯道具が出土した。

図3
2区調査区全景
(南から)

写真中央及び左下に試掘トレンチ、右下に近世の井戸と土壙がある以外は全て弥生時代の遺構である。近世の井戸は道路面(鹿津街道)から約20m奥に位置し、町家の裏側にあつたと推定される。

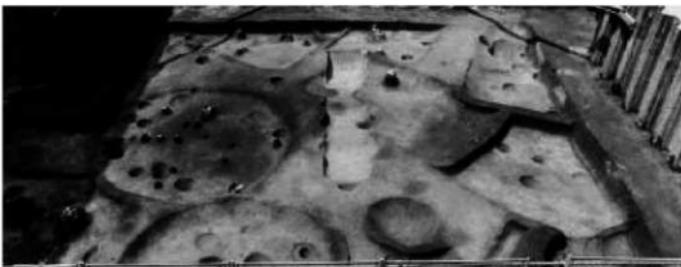


図4
1区調査区全景
(南から)

1区で検出された遺構は全て弥生時代の所産と考えられる。住居址は方形を呈し、円形のものは確認されなかった。調査区中央のピット群は本来住居址に伴うものと考えられるが、遺構の認定が困難で住居址を発見できていない。



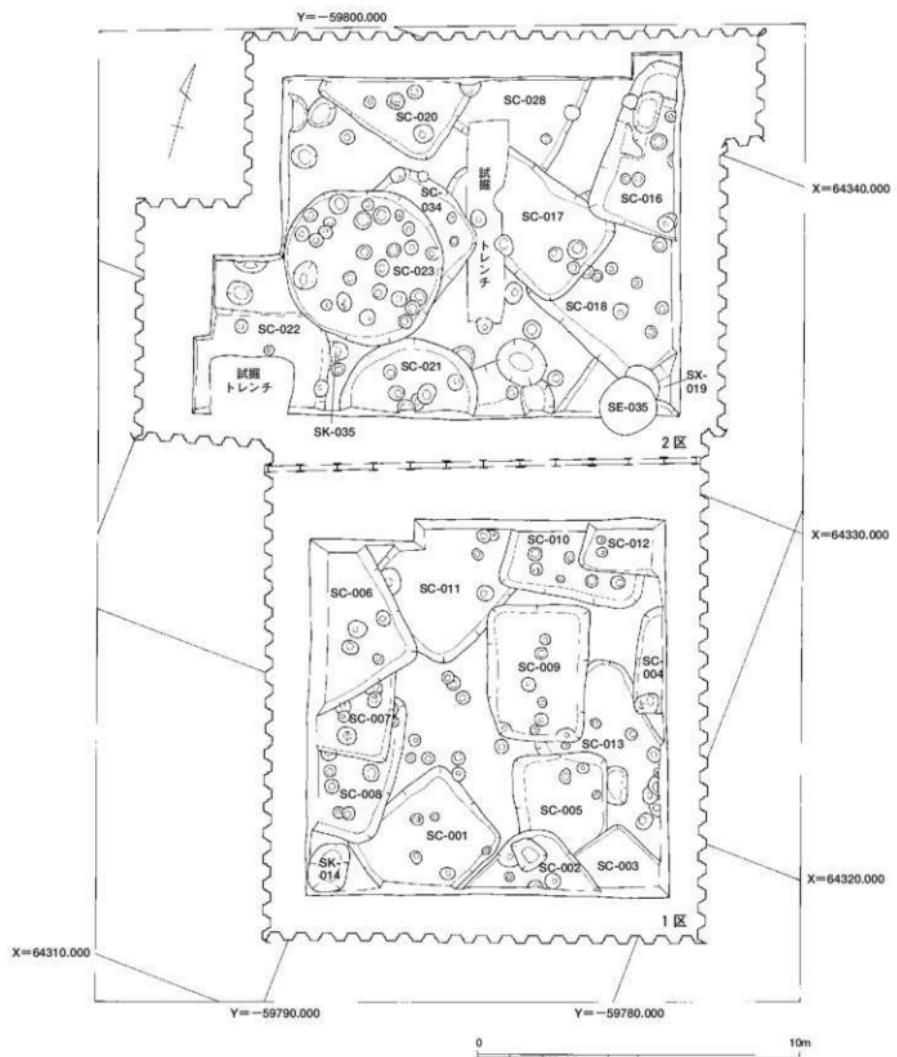


図5 遺構配置図（縮尺1／150）

2 弥生時代の遺構と遺物

該期の遺構は中期後半の竪穴住居址22棟、土壙1基、ピット等からなる。住居址は方形のものが20棟、円形のものが2棟であり、円形のものが後出すると考えられる。1・2区で遺構密度の差は看取されない。

(1) 1区の調査

1) 竪穴住居址（略号SC）

SC-001（図6左上）

1区南側で検出した。西側のSC-008に切られる。南側の角は調査区外に延びるが、平面形は検出面で長辺約4.0m、短辺約3.3mを測る隅丸長方形を呈すると考えられる。下端での占有面積は約10.2m²と考えられる。床面は遺構検出面から深さ約5~20cmで検出され、ピット数個を検出したが、主柱穴が明確でなく上部構造が想定しにくい。

出土遺物（図7）

覆土から、弥生時代中期後半の土器片がビニール袋2袋分出土した。5は口径23.8cmに復元される甕の口縁部片で、外器面に縦刷毛、内器面に斜め刷毛の後にナデを施す。胎土は精良で、外器面に煤が付着している。

出土遺物から、SC-001は弥生時代中期後葉には廃絶していたと推定される。

SC-002（図6右上）

1区南側で検出した。SK-005に切られ、北側のSC-003・005を切る。北側の一角を検出したに過ぎず、住居址か断定できないが、床面やピット等の状況から住居址と推定した。規模等は不明だが、一辺3m以上の隅丸方形もしくは長方形平面を呈していたと推測される。床面は遺構検出面から深さ約10cmで検出され、ピットを数個を検出した。深さが約50cmを測るものがあり、主柱穴の可能性も考えられるが詳細は不明である。

出土遺物（図7）

覆土から弥生時代中期の土器細片がビニール1袋分出土した。この他、10は前期板付II式甕の小片である。口縁部に刻目があり、胎土は粗く白色粗砂を多く含む。内器面に斜め方向のナデ、口縁部には横ナデが施される。8は甕の口縁部片で、口径31.6

cmに復元される。内器面に横方向のナデ、口縁部に横ナデ、外器面には縦方向の刷毛目が施され、煤が付着する。胎土は精良で、色調は橙色を呈す。12は甕の胴部から底部片で、底径9.6cmに復元される。内器面に横方向のナデ、外器面に縦方向の刷毛目が施され、煤が付着する。胎土は粗く、白色粗砂を多く含む。色調はにぶい黄橙色を呈す。底部が故意に穿孔されている。

出土遺物から、SC-002は弥生時代中期には廃絶していたと推定される。

SC-003（図6右中）

1区南東角で検出した。SC-002に切られ、SC-005を切る。北西角を検出したに過ぎず、住居址か断定できないが、床面の状況から住居址と推定した。規模等は不明で、一辺1.8m以上の隅丸方形もしくは長方形平面を呈していたと推測される。床面は、遺構検出面から深さ約10cmで検出された。床面からピットは検出されなかった。

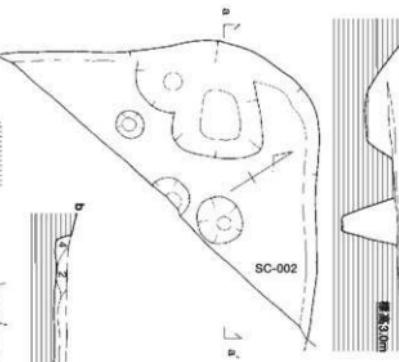
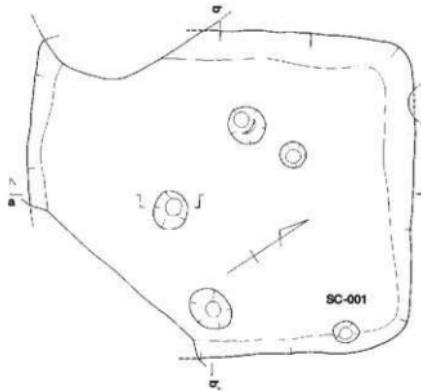
出土遺物（図7）

覆土から弥生土器の細片がビニール1袋分と、大型のものを含む砂岩製の砥石が出土した。3は甕の口縁部片である。胎土に白色砂粒を含み、色調はにぶい橙色を呈す。13は甕の底部片で、外器面に縦方向の刷毛目が施される。内器面に焦げが付着しており、使用痕と考えられる。胎土はやや粗く白色砂粒を含み、色調はにぶい橙色を呈す。19は粗粒砂岩製の平砥石片で、最大厚4.6cmを測る。両面が研ぎ減り、最も薄い部分で2.2cmを測る。20は粗粒砂岩製の大型砥石片で最大厚9.8cmを測る。表面は平砥石として使用されるが、中央部に浅い溝状の研ぎ痕が数条確認される。背面にも溝状の研ぎ痕が数条確認できる。また側面にも使用痕と考えられる溝状の凹みがあるが、欠損しており不明瞭である。

出土遺物から、SC-002は弥生時代中期には廃絶していたと推定される。

SC-001土層注記

- 1層 咖茶褐色砂層 線まりあり。黄褐色砂小ブロックを含む。
- 2層 茶褐色砂層 線まりあり。混入物なし。
- 3層 明茶褐色砂層 線まりあり。混入物なし。
- 4層 明茶褐色砂層 線まりあり。色調上層に比べてや白色を帯びる。



SC-004土層注記

- 1層 咖茶褐色砂層 線まりあり。黄褐色砂小ブロックを含む。
- 2層 咖茶褐色砂層 線まりあり。黄褐色砂小ブロックを含む。
- 3層 茶褐色砂層 線まりあり。混入物なし。
- 4層 明茶褐色砂層 線まりあり。混入物なし。

SC-005土層注記

- 1層 黒褐色砂層 線まりあり。有機質腐食土層。
- 2層 咖茶褐色砂層 線まりあり。混入物なし。
- 3層 明茶褐色砂層 線まりあり。混入物なし。
- 4層 咖茶褐色砂層 やや線まりあり。混入物なし。

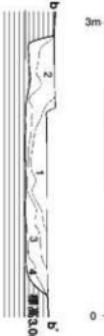
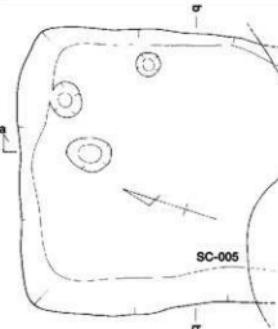
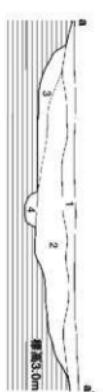
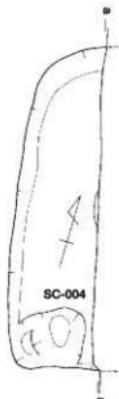


図6 SC-001～005実測図（縮尺1/50）

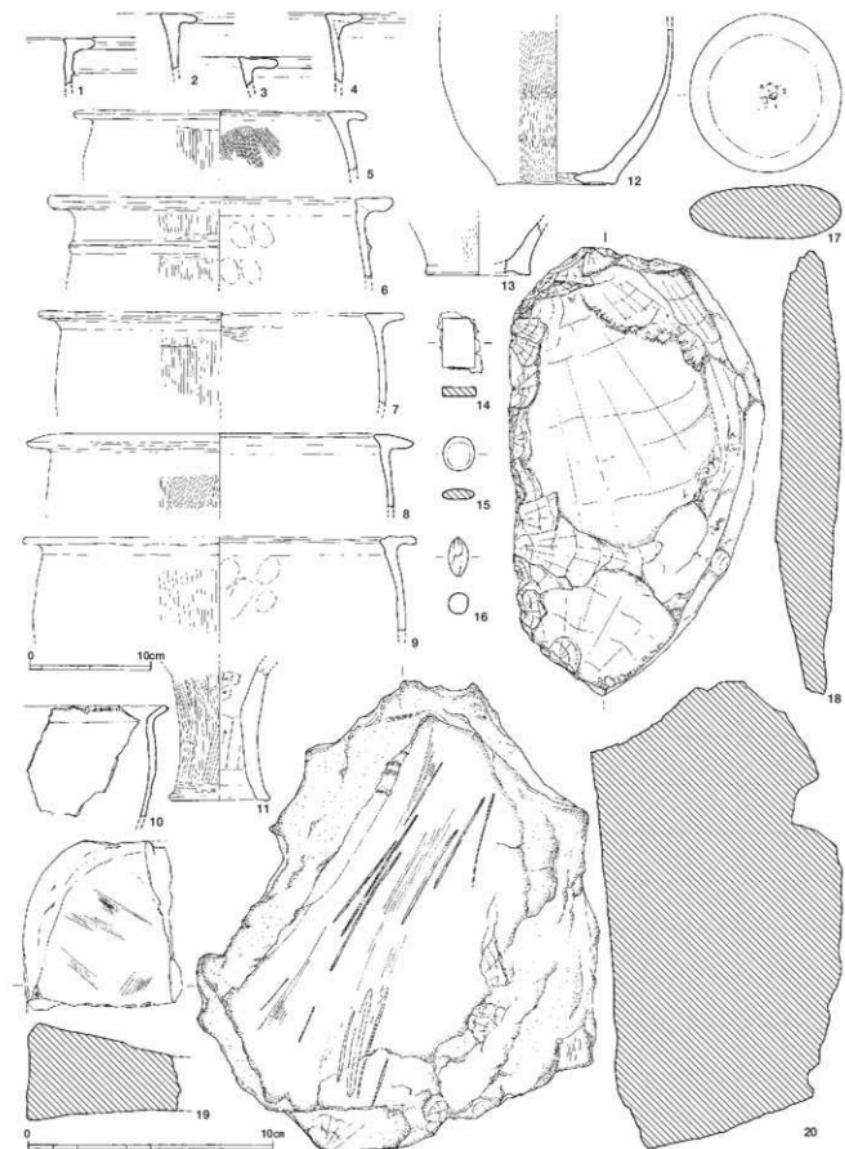


图7 1区遗构出土遗物实测图（缩尺1/4、1/2）

SC-004 (図6左下)

1区東側で検出した。南側のSC-013を僅かに切る。西側の一辺を検出したに過ぎず、住居址であるか断定できないが、床面の状況等から住居址と推定した。規模等は不明だが、検出された一辺は長さ3.3mを測り、周辺の住居址の状況から、短辺であった可能性も考えられる。また平面は、隅丸方形もしくは長方形と推測される。床面は遺構検出面から深さ約30cmで検出され、南西角にピットを1個検出したが、主柱穴の状況は不明である。

出土遺物 (図7)

覆土から弥生時代中期の土器細片がビニール1袋分出土した。2は甕の口縁部小片で、内器面にナデ、口縁部に横ナデ、外器面に縦方向の刷毛目が施される。胎土は精良で、色調は灰白～浅黄橙色を呈する。

出土遺物から、SC-004は弥生時代中期には廃絶していたと推定される。

SC-005 (図6右下、10)

1区南側で検出した。南側のSC-013を切り、SC-002・003に切られる。下層から床面下端が検出された。規模は長辺約3.4m、短辺約2.8mの隅丸長方形平面を呈し、下端での占有面積は約6.4m²と考えられる。床面は遺構検出面から深さ約20cmで検出され、柱穴数個を検出した。主軸上のピットは床面からの深さ約20cmを測り、主柱穴の可能性があるが、対になる柱穴が検出できなかった。

出土遺物 (図7)

覆土から弥生土器細片がビニール1袋分出土した。1は甕の口縁部小片で、内器面にナデ、外器面頸部下方に突帶を貼り付けた後、口縁部付近に横ナデを施す。胎土はやや粗く、色調は純い橙色を呈す。17は玄武岩製の磨石で、長さ6.5cm、幅6.0cm、厚2.1cmを測る。両面に叩打痕が認められ、全体によく磨かれている。

出土遺物から、SC-002は弥生時代中期には廃絶していたと推定される。

SC-006 (図8左上)

1区北西角で検出した。SC-007・011を切る。東側の角を検出したに過ぎず、規模等は不明であるが、一辺3.7m以上の隅丸方形もしくは長方形平面

を呈すると推測される。床面は遺構検出面から深さ約30cmで検出され、ピット数個を検出した。また北東辺のほぼ中央と推測される部分に、床面から約10cmのところで僅かながら焼上面が確認され、燎の可能性も考えられる。焼土部分の手前側には、長さ約70cm×幅約35cmの棒状に加工した花崗岩が掘り方に沿うように据えてあった(図12右端)。現今のことろ性格を明確にできない。

出土遺物 (図7)

覆土から弥生時代中期の土器細片がコンテナケース1箱分出土した。7は口径29.8cmに復元される甕の口縁部片で、外器面に縦刷毛の後粗くナデ、内器面にナデを施す。胎土は精良で粗砂を含む。15は長さ1.4cm、幅1.3cm、厚0.45cmの碁石状の石で、全体によく磨かれている。用途は不明である。

出土遺物から、SC-006は弥生時代中期中葉には廃絶していたと推定される。

SC-007 (図8右上)

1区西側で検出した。SC-008を切り、SC-006に切られる。南東側の角を検出したに過ぎず、住居址か断定できないが、床面やピット等の状況から住居址と推定した。規模等は不明だが、一辺3m以上の隅丸方形もしくは長方形平面を呈すると推測される。床面は遺構検出面から深さ約25cmで検出され、ピット数個を検出したが、主柱穴は不明である。

出土遺物 (図7)

覆土から弥生土器片がコンテナケース半箱分出土した。4は甕の口縁部片で、外器面に縦方向の刷毛目を施す。胎土は粗く、粗砂を多く含む。色調は純い黄橙を呈する。

出土遺物から、SC-006は弥生時代中期中葉には廃絶していたと推定される。

SC-008 (図8中)

1区南西側で検出した。SC-001を切り、SC-007に切られる。規模は東側の一辺が4.6mを測る隅丸方形もしくは長方形平面を呈すると考えられる。床面は遺構検出面から深さ約25cmで検出され、ピットを数個検出したが、主柱穴は不明である。

出土遺物

覆土から弥生時代中期の甕や蓋などの土器片がビ

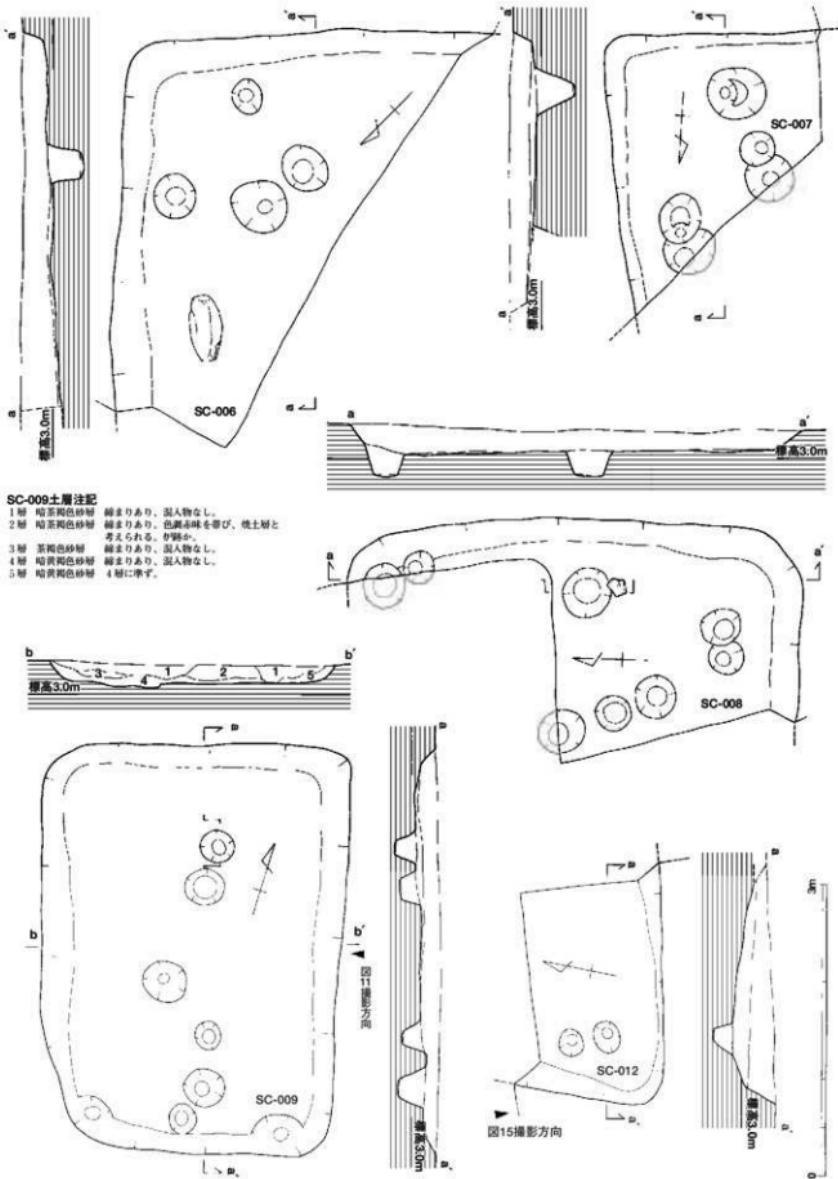


図8 SC-006～009、012実測図（縮尺1/50）

ニール袋1袋強出土したが、図化に耐えない。

遺構の切り合い関係から、SC-008は弥生時代中期中葉には廃絶していたと推定される。

SC-009 (図8左下、11)

1区のほぼ中央で検出した。SC-011と013を切る。規模は長辺が約4.2m、短辺が約3.1mの隅丸長方形平面を呈し、下端での占有面積は約9.6m²と考えられる。床面は、遺構検出面から深さ約20cmで検出され、主軸上を中心にピット数個を検出した。検出位置から、中央に近いものの2個が主柱穴と考えられ、床面からの深さ約20cmを測る。その他、南辺側の隅2箇所でも浅いピットをそれぞれ1個検出し、上部構造に関係するものと推定される。

出土遺物 (図7)

覆土から弥生時代中期後半の土器片がコンテナケース半箱分出土した。床面直上の遺物はない。9は甕の口縁部片で、口径32.0cmに復元される。外器面に縦方向の刷毛目、内器面に指頭圧痕とナデが施される。胎土は精良である。16は土製投弾で長さ3.2cm、幅1.7cmを測る。胎土は精良である。

出土遺物から、SC-009は弥生時代中期後葉には廃絶していたと推定される。

SC-010 (図14～16)

1区の北側で検出した。SC-011を切り、SC-012に切られる。南側の一辺で約4.4mを測り、平面形は隅丸方形もしくは長方形を呈すると推測される。床面は遺構検出面から深さ約30cmで検出され、南辺沿いにピットが数個検出された。上部構造に関係すると推定される。

認定した床面より約15cm程度上面で、滑石の剥片が多量に出土した。調査区からは滑石製漁錐やその未製品、また砂岩製砥石等が比較的多く出土しており、これらの状況から本住居址は滑石製漁錐の生産に関わる工房址である可能性が高いと推定できる。住居址の覆土は埋没順に茶褐色砂層(3層)、暗茶褐色砂層(2層)、灰褐色砂層(1層)であるが、多量の滑石剥片は、層位的に床面直上付近から3層上面及び2層中から出土しており、この面が本住居址の最終利用面と考えられる。また、廃棄された土器片は2層上面の1層中から出土しており、出土状

況からSC-010は土器片の示す年代には既に廃棄されていたと推定される。

出土遺物 (図7)

第1層を中心に弥生時代中期後半の土器片がビニール袋2袋分程度出土した。床面からは多量の滑石剥片が出土している。調査途中、床面から滑石剥片が出土し始めたので周囲の覆土を水洗して検出したものもある。大きさは、微細なものから、最大のもので長さ6.3cm、幅6.0cm、厚2.9cmを測る。6は口径28.2cmに復元される甕の口縁部片で、外器面に縦刷毛を施した後、胴部上方に突帯を巡らせる。内器面には指頭圧痕とナデが施される。胎土は精良である。11は粗製器台で、下端部径8.2cm、器壁は厚い部分で1.6cmを測る。外器面に縦方向の刷毛、内器面に粗い縦方向の板状工具による削りが確認される。18は玄武岩の石斧未製品で、長さ18.3cm、幅10.5cm、厚3.7cmを測る。

出土遺物から、SC-010は弥生時代中期後葉には廃絶していたと推定される。

SC-011 (図8上、12)

1区北側で検出した。SC-006、009、010に切られる。規模は長辺約4.8m以上、短辺約3.8mの隅丸長方形平面を呈すると考えられ、下端での占有面積は約15.3m²以上と推測される。床面は遺構検出面から深さ約20cmで検出され、主軸に沿ってピットを検出した。主柱穴の可能性を考えられる。

出土遺物 (図17、18)

覆土から弥生土器片等がコンテナケース3箱分出土した。21は甕の口縁部片で、口径22.8cmに復元される。外器面に縦刷毛、内器面には斜め方向の刷毛目を施した後、口縁部に横ナデを施す。胎土はやや粗く白色粗砂を含む。色調は明るい橙褐色を呈す。22は甕の口縁部片で、口径25.4cmに復元される。外器面に縦刷毛、内器面にはナデ調整の後、口縁部に横ナデを施す。胎土は精良で、色調は薄い黄橙褐色を呈す。24は丹塗磨研壺の底部片で、底径6.6cmを測る。底部にはナデ、外器面は横磨きの後、赤色顔料が塗布される。内底には指頭圧痕と工具痕が認められる。胎土は概ね精良で、色調は黄褐色を呈する。丹塗部は明るい橙褐色を呈する。25は丹塗磨

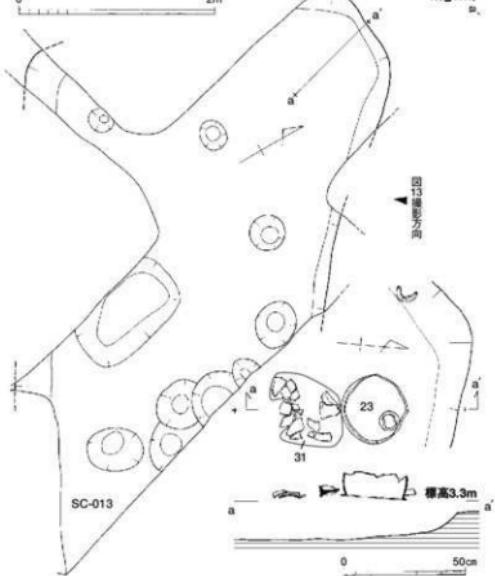
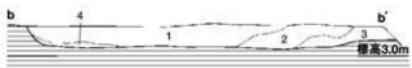


図9 SC-011、013実測図（縮尺1/50、1/20）



図10 SC-005検出状況（南から）



図11 SC-009検出状況（東から）



図12 SC-011遺物出土状況（北から）



図13 SC-013検出状況（東から）

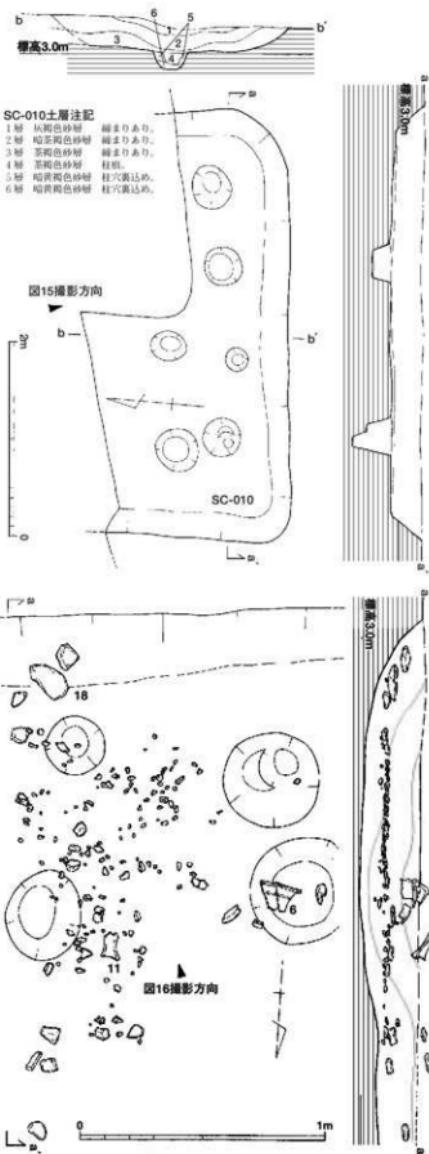


図14 SC-010及び遺物出土状況図(縮尺1/50, 1/20)

研壺の底部片で、底径12.0cmを測る。底部はナデ、外器面には横磨き後の赤色顔料が塗布される。内底には指頭圧痕が認められる。胎土はやや粗く、色調は浅い黄橙褐色を呈する。29、30は粗製器台片で、底径は順に11.6cm、7.8cmを測る。器壁が厚く、内器面の焼成が不良で剥落が激しい。内・外器面共に指頭圧痕が認められ、外器面には縱方向の刷毛目が施される。33は壺高27.2cm、口径22.7cm、頸部径14.8cm、胴部径23.4cm、底径7.0cmを測る。内・外器面胴部下方に刷毛目の後全体にナデを施す。外器面に一部赤色顔料が残るが風化が進む。34は壺の胴部片で頸部に1条、最大径付近に2条の突帯が付く。胴部最大径28.0cm、底部径7.4cmを測る。35は甕もしくは壺の底部片である。

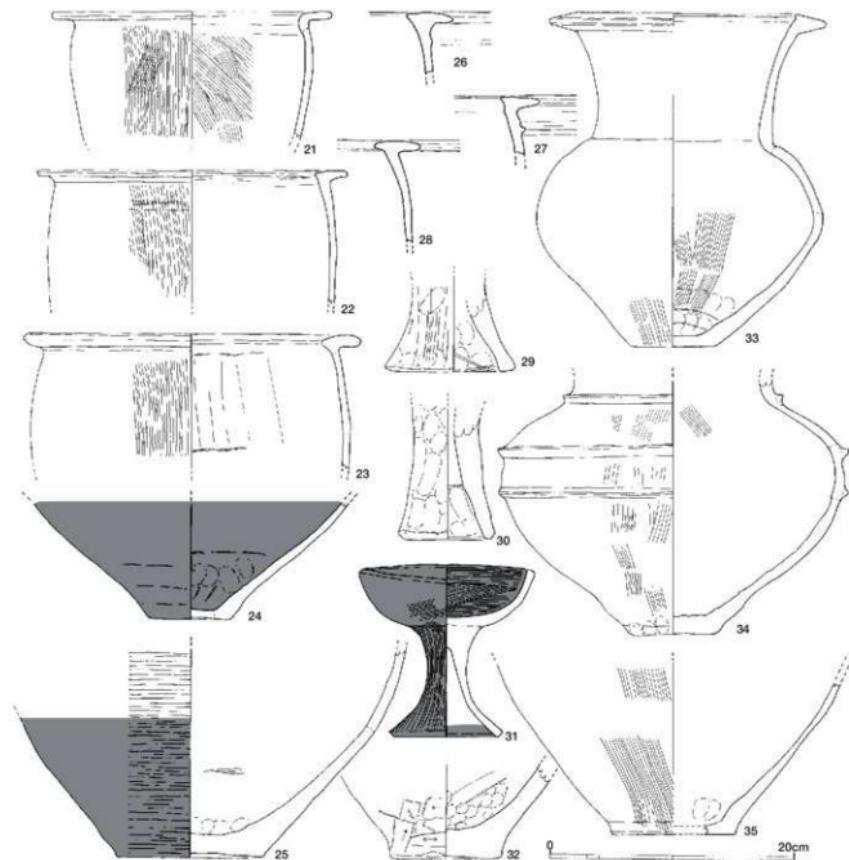
出土遺物から、SC-011は弥生時代中期中葉には廃絶していたと推定される。



図15 SC-010、012検出状況(北から)



図16 SC-010遺物出土状況(北から)



半側面は丹塗の範囲を示す。

図17 SC-011~013出土土器実測図（縮尺1/4）



図18 弥生土器甕・高環

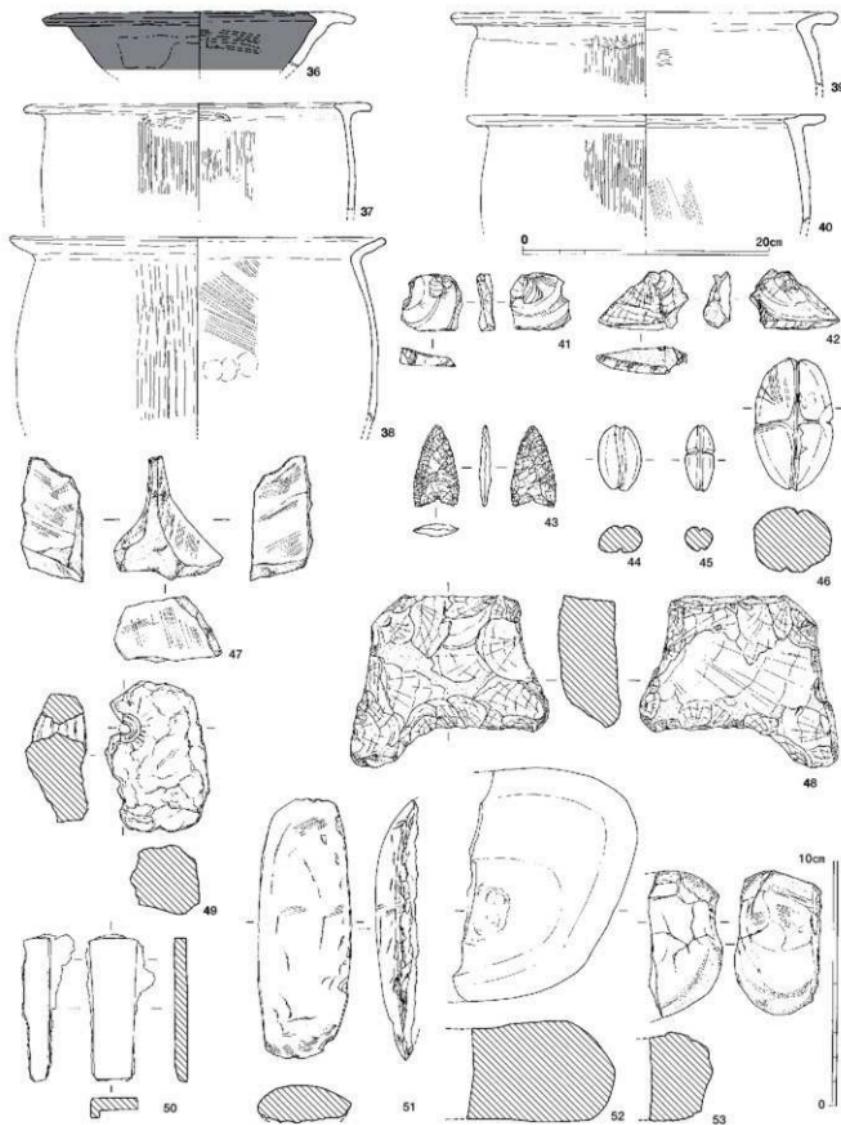


図19 1区包含層出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）

SC-012 (図8右下)

1区北側で検出した。SC-010を切る。南西の一角を検出したに過ぎず、住居址か断定できないが、床面やピット等の状況から住居址と推定した。規模等は不明だが、一辺2.5m以上の隅丸方形もしくは長方形平面を呈すると推測される。床面は遺構検出面から深さ約40cmで検出され、ピットを2個検出したが主柱穴は不明である。

出土遺物 (図17)

覆土から弥生土器片等がコンテナケース半箱弱出土した。26～28は甕の口縁部片で、27は頸部下に1条の突帶が付く。外器面に継刷毛を施した後、口縁部に横ナデを施す。

出土遺物から、SC-012は弥生時代中期中葉には廃絶していたと推定される。

SC-013 (図9下、13)

1区東側で検出した。SC-003・004・005・009に切られる。また住居址東側の立ち上がりが確認できなかった。後出する遺構に激しく切られ、規模や形状が不明確だが、短辺3.7m、長辺4m以上で、平面形は隅丸長方形を呈すると考えられる。床面は遺構検出面から深さ約10cmで検出された。床面ではピット数個を検出したが、主柱穴は不明である。

出土遺物 (図7、17、18)

覆土から弥生土器片等がコンテナケース半箱弱出土した。14は長さ2.05cm、幅1.3cm、厚0.4cmを測る板状の不明鉄製品である。23は甕の胴部～口縁部片で、口径27.5cmを測る。焼成良好で胎土は精良、色調は明るい橙褐色を呈する。外器面に継刷毛を施した後、口縁部に横ナデを施す。31は丹塗磨研高坏で、口径14.2cm、頸部径6.0cm、底径9.2cm、器高14.0cmを測る。坏部には横方向の磨き、同底部は不整方向の磨きが、また坏部外器面には磨きの後ナデを施す。脚部外器面には継方向の磨きの後、端部に横方向のナデを施す。脚の内奥部以外に丹が塗布され、強い赤みの橙褐色を呈する。焼成は堅致で胎土は精良である。32は甕もしくは壺の底部片で、底径9.0cmを測る。内底部には指頭圧痕と刷毛目が、外器面には刷毛目が施される。焼成良好で胎土は精良、色調は明るい橙褐色を呈する。

出土遺物から、SC-013は弥生時代中期中葉には廃絶していたと推定される。

2) その他の遺構と包含層中の遺物

その他の遺構

遺構検出面ではピットを複数検出し、見落とした住居址に伴う可能性が考えられる。この他、土塙などを検出している。

包含層及びトレンチ出土の遺物 (図19)

包含層中の出土遺物の総量はコンテナケース8箱分で、弥生時代中期の須玖式、城の越式土器片が主体である。遺構確認が困難だったため、本来住居址に伴うものも含まれると考えられる。36は蓋の口縁部片で、復元口径25.6cm。外器面に丹塗りの痕跡があるが風化が進む。37～40は甕の口縁部片で、復元口径28.4～31.6cm。41、42は腰岳産黒曜石製剥片石器で、端部に使用痕と考えられる微細剥離が確認できる。43はサヌカイト製の打製石鎌で長さ3.3cm、幅1.8cm、厚0.4cmを測る。2a類に分類され、縄文時代晩期以前の可能性がある。44～46は滑石製有溝石錘で、44は長軸方向にのみ溝が巡る。他は短軸方向にも溝が巡る。47は試掘トレント出土の砂岩製砥石で、3方向に使用痕がある。48は今山産玄武岩製の砾石器で、下端部に2つの突起を作る。高さ7.1cm、上端幅6.1cm、下端幅8.1cm、厚さ2.3cmを測る。下方と側面1ヶ所に抉りを入れ、使用痕と考えられる剥離が観察される。西北九州型漁撈貝の一つであり、縄文後期を中心に出土し、弥生中期まで残る。福岡平野での出土は、今回が初例と考えられる。試掘トレントからの出土である。49は滑石製有孔石錘片で残存長6.2cm、最大厚3.1cmを測る。孔は両側穿孔で、端部の径1.2～1.4cm、中心部の径は0.4cmを測る。50は鋳造鉄斧片を壁に再利用した工具である。長さ5.8cm、上端幅1.9cm、下端幅1.6cm、厚0.5cmを測る。下端部に研ぎ出された痕跡が僅かながら確認される。51は今山産玄武岩製磨石片で、端部が僅かに残存する。残存長10.6cm、幅3.8cmを測る。52は砾岩製の磨石片で、上面の中央部に使用痕があり浅く凹む。53は高さ5.9cmの砂岩製の砥石で、側面に使用痕がある。

(2) 2区の調査

1) 竪穴住居址 (略号SC)

SC-016 (図22左上、23)

2区の北東角で検出した。SC-017、018を切る。東半は調査区外で全体の規模は不明だが、西側の南北一辺が5.1mを測る隅丸方形もしくは長方形平面を呈すると推測される。床面は遺構検出面から深さ約30cmで検出され、床面からピットを数個検出したが主柱穴は不明である。西辺のほぼ中央部で床面の地山が一部高くなり、入り口部分もしくはベットに相当する可能性が考えられる。

出土遺物 (図32)

覆土から弥生土器等がコンテナケース2箱分出土した。床面直上の遺物はなくいずれも破碎した状態で出土した。55~58は粗製器台で外器面に指頭圧痕が見られる。58は器高16.7cm、上径8.8cm、下径9.1cmを測る。いずれも器壁が厚く焼成不良で内器面に剥落が見られる。60は丹塗磨研坏片で口径15.2cmに復元される。63~71は甕の口縁部片で、口径は順に29.8cm、31.4cm、29.4cm、27.6cm、29.1cm、26.0cm、26.2cm、29.6cm、29.4cmに復元される。64、65、71は口縁部がやや立ち上がり気味である。

出土遺物から、SC-016は弥生時代中期後葉には廃絶していたと推定される。

SC-017 (図22右上、24~26)

2区の中央やや東寄りで検出した。SC-016に切られ、018、028を切る。東半は試掘トレンチに切

られる。短辺3.2m、長辺4.3m以上の隅丸長方形平面を呈すると考えられる。床面は遺構検出面から深さ約15cmで検出され、ピットを数個検出したが主柱穴は不明である。

出土遺物 (図21、22、31、33)

覆土から弥生土器を中心とした遺物がコンテナケース1箱分出土した。床面直上の遺物はない。また、覆土中の甕片の直下からトンボ玉が1点出土した。54は直径1.75cmを測るトンボ玉である。使用されるガラスは透明な紺青、透明性のない白である。透過X線写真観察を行ったところ、内部にやや大きな気泡が確認された。また端部に穴を閉じた痕跡が見られることから、製作技法は芯棒の先端に紺青と白の2色のガラスを巻き付けて芯棒を抜き取り、その痕を再加熱して閉じたものと考えられる。第4項2節で詳述する。72は蓋で高さ11.3cm、口径30.8cm、摘部径6.5cmを測る。外器面には縦方向の刷毛目を施した後ナデが施される。内・外器面共に使用痕の煤が付着する。また内器面には直径約25cm、幅約3.5cmで環状に煤が付着していない部分があり、使用時に對になる甕の口縁部が当たっていた痕跡と考えられる。胎土はやや粗く色調は明るい橙褐色を呈する。焼成は良好である。73は甕片で口径29.4cmに復元される。外器面に縦方向の刷毛目、内器面には指頭圧痕とナデが施される。口縁部には横ナデが施される。74は甕片で口径32.4cmに復元される。外器面には縦方向の刷毛目、内器面には斜め方向のナデ、口縁部には横ナデが施される。口縁部内器面

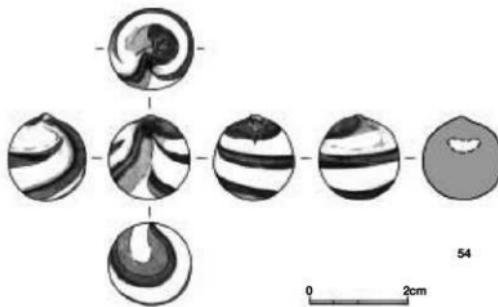


図20 SC-017出土トンボ玉実測図 (縮尺1/1)



図21 トンボ玉
ほば原寸 直径1.75cm
SC-017 竪穴住居址出土。
写真は側面、右端が上端部。

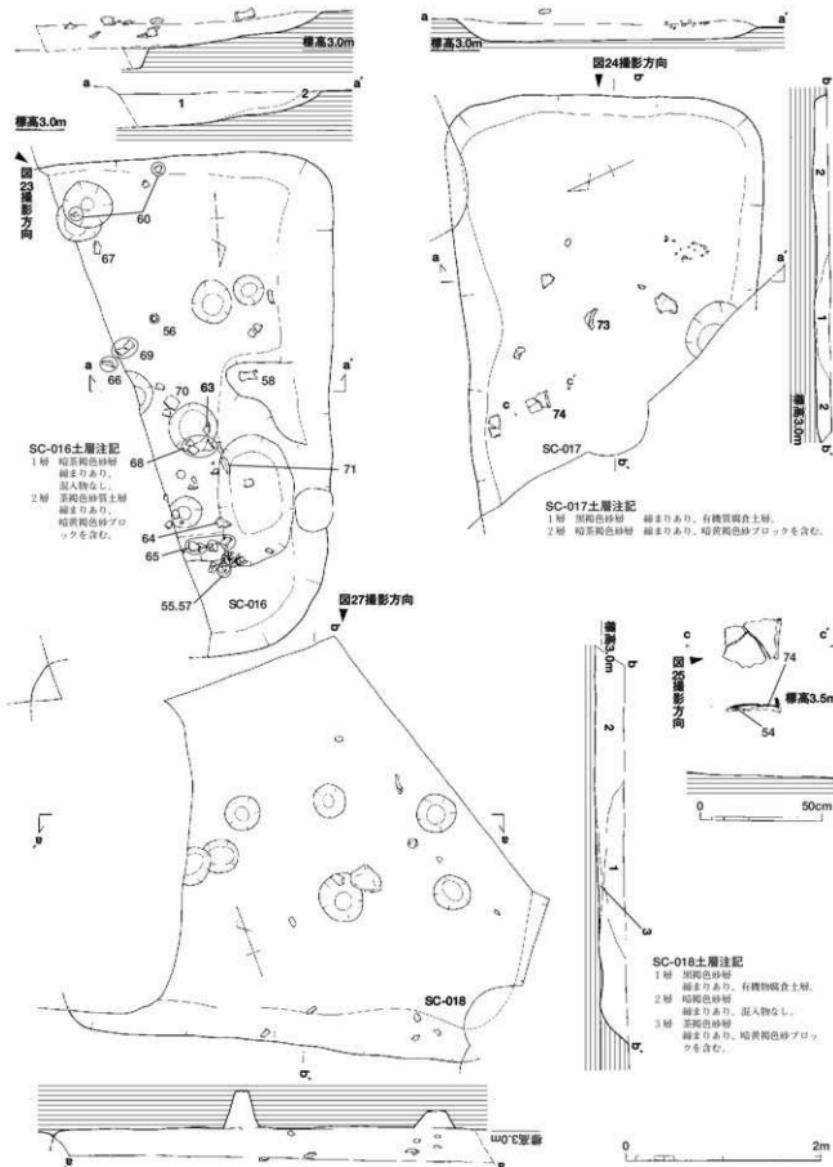


図22 SC-016~018実測図(縮尺1/50)



図23 SC-016遺物出土状況（東から）



図27 SC-018遺物出土状況（北から）



図24 SC-017遺物出土状況（東から）



図28 SC-018砥石等出土状況（西から）



図25 SC-017土器出土状況（北から）



図29 SC-018石錘木製品出土状況（東から）



図26 SC-017トンボ玉出土状況（北から）



図30 SX-019石錘出土状況（東から）

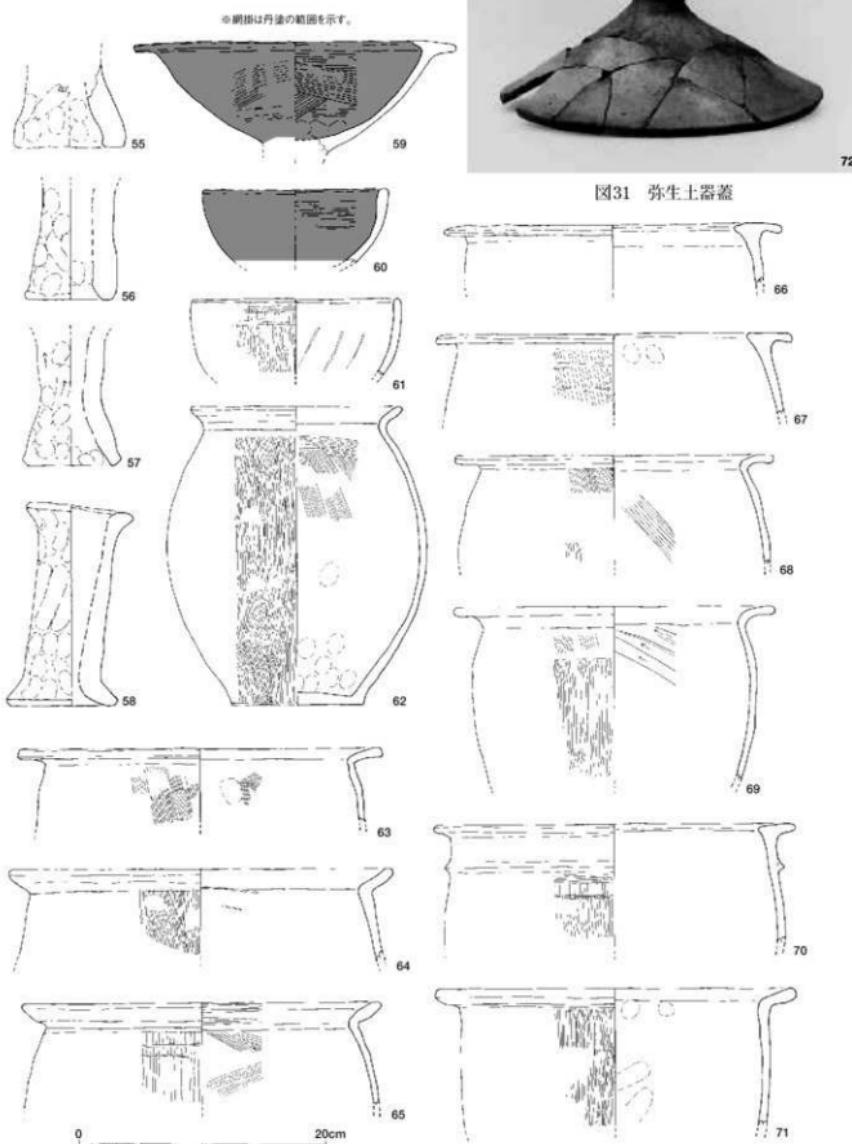


図31 弥生土器蓋

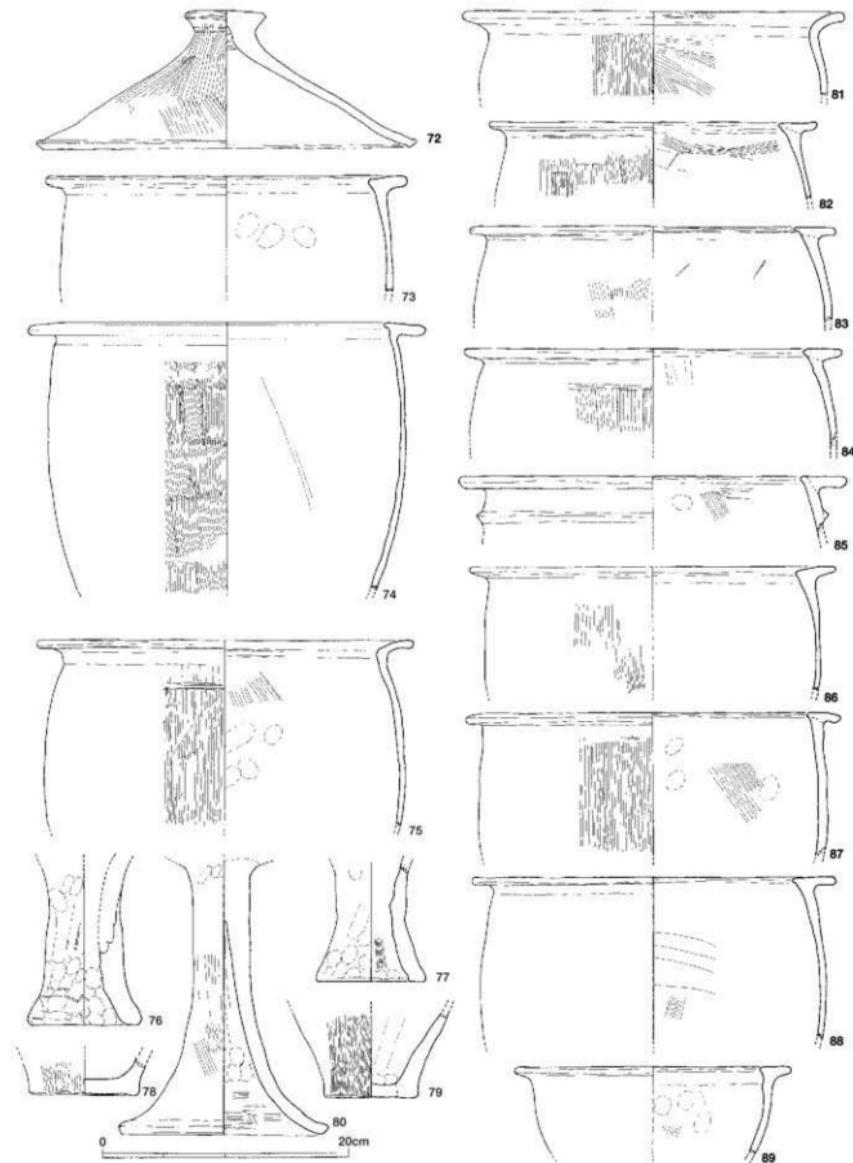


図33 SC-017、019、020、022出土土器実測図（縮尺1/4）

側は僅かに突出する。外器面には部分的に煤が付着する。胎土に白色粗砂・細砂、黒色細粒を多く含み、焼成は良好である。

出土遺物から、SC-017は弥生時代中期中葉には廃絶していたと推定される。

SC-018 (図22下、27~29)

2区の東側で検出した。SC-016、017、SX-019、SE-035、SK-036に切られる。東側は調査区外で全体の規模は不明だが、短辺3.5m以上、長辺5.1m以上の隅丸長方形平面を呈すると推定される。床面は遺構検出面から深さ約30cmで検出した。床面からピットを数個検出しており、主軸上のものが主柱穴と推定される。

出土遺物 (図34、35)

覆土から弥生土器の細片がコンテナケース1箱弱出土したが、いずれも図化に耐えない。この他に、漁錐の未製品や砂岩製砥石などが出土している。93は滑石製漁錐の未製品と考えられ、上端部が欠損する。残存長5.2cm、長径2.4cm、短径1.9cmを測る。上半・下半共に8面ずつ面取りされる。100、101は

砂岩製砥石である。100は残存長12.8cm、幅8.4cm、厚5.1cmを測り、3面に使用痕が確認できる。106は残存長12.1cm、幅8.4cm、厚5.5cmを測り、2面に使用痕が確認される。

出土遺物と遺構の切り合い関係から、SC-018は弥生時代中期中葉には廃絶していたと推定される。

SC-020 (図36左、37、38)

2区の北西側で検出した。ピットに切られる。北半は調査区外であり全体の規模は不明であるが、南側の東西一辺が4.1mを測る隅丸方形もしくは長方形平面を呈すると推測される。床面は遺構検出面から深さ10cm弱で検出され、床面からピットを数個検出した。この内、南辺に沿った2個が主柱穴の可能性がある。

出土遺物 (図33、35)

覆土から弥生土器の細片がコンテナケース半箱弱出土した。この他に、砂岩製砥石などが出土している。75は甕で口径30.6cmに復元される。内・外器面に縦方向の刷毛目を施した後、内器面はナデ消している。口縁部には横ナデを施す。胎土は概ね精良

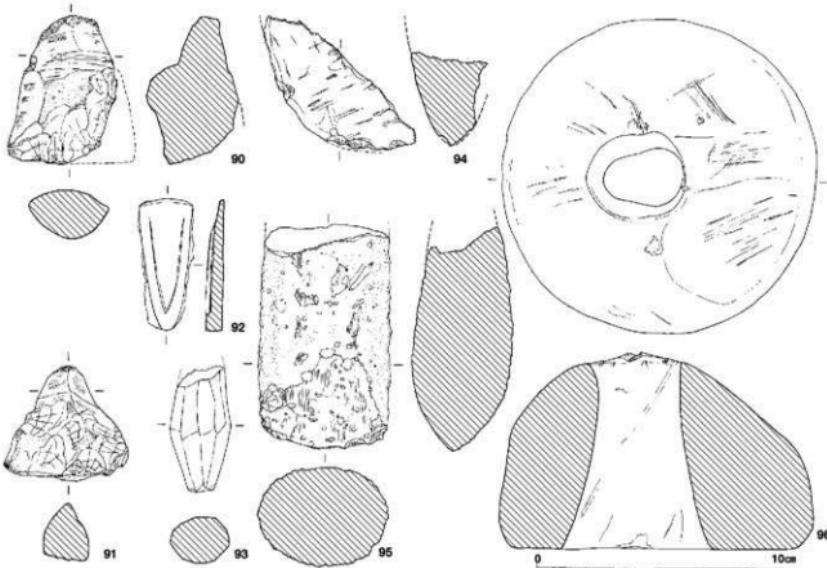


図34 2区遺構出土石器・鉄器実測図 (縮尺1/2)

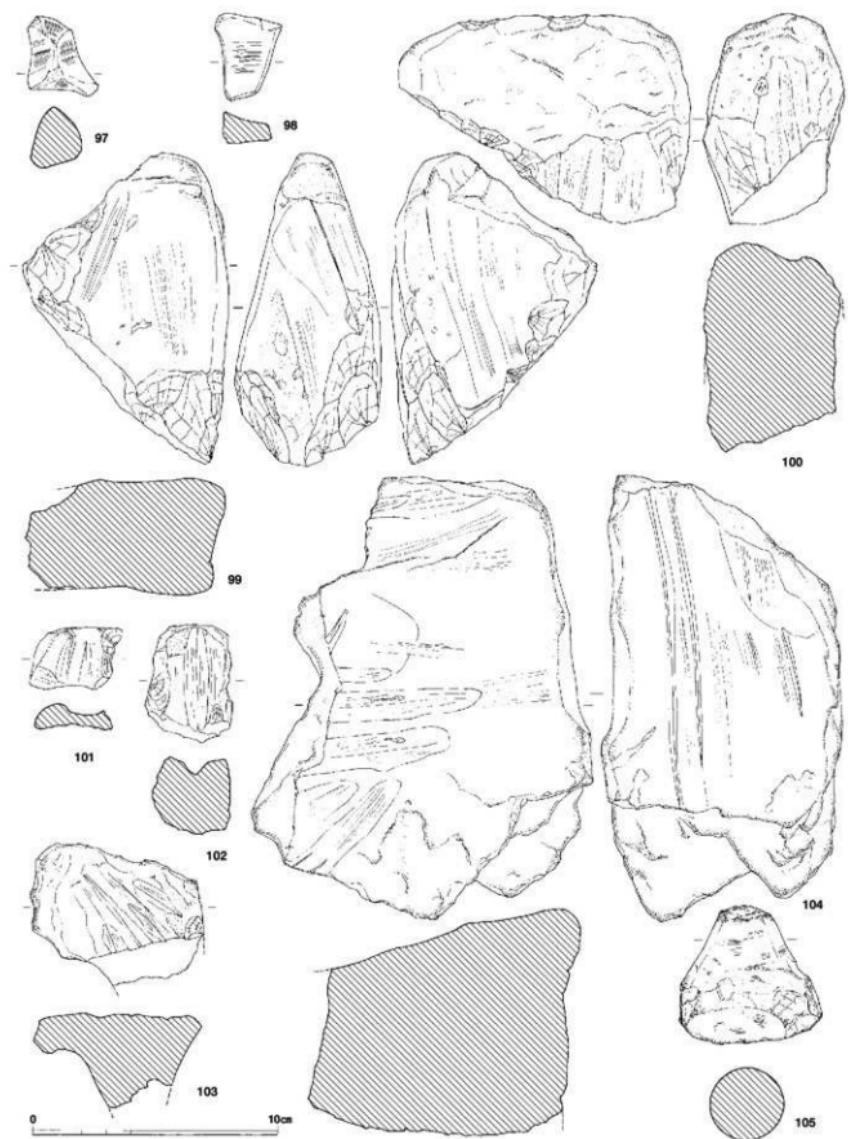


図35 2区遺構及びトレンチ出土石器実測図（縮尺1/2）

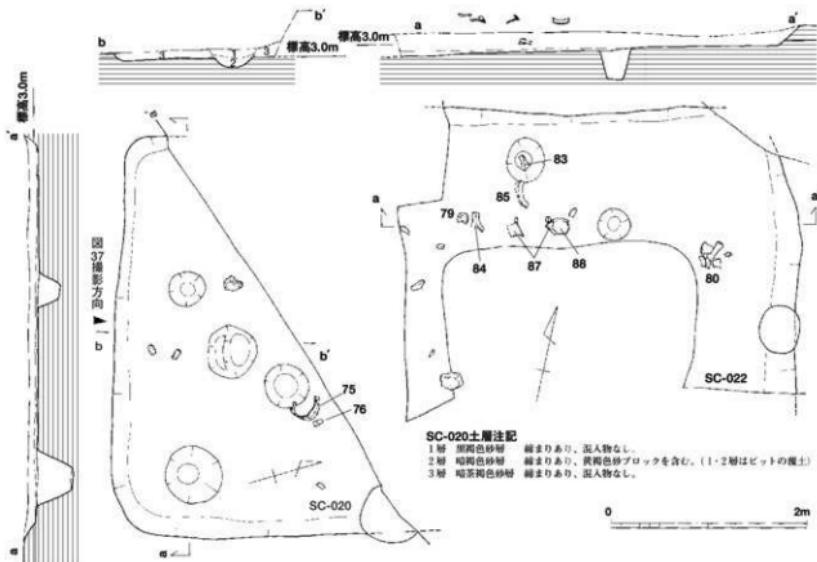


図36 SC-020、022実測図（縮尺1／50）



図37 SC-020遺物出土状況（南から）



図39 SC-022砾石出土状況（北から）



図38 SC-020砾石出土状況（南から）



図40 SC-022砾石出土状況（西から）

で、焼成は良好である。色調は明るい橙褐色を呈する。79は粗製器台で底径9.4cmを測る。内・外器面共に指頭圧痕が確認される。器壁が厚く焼成不良で内器面が剥落する。105は砂岩製の砥石で、残存長18.1cm、幅13.9cm、厚8.4cmを測る。2面に使用痕が確認され、溝状の浅い凹みが確認できる。側面の研ぎ痕には明確な稜が認められる。

出土遺物から、SC-020は弥生時代中期後葉には廃絶していたと推定される。

SC-021 (図41上、42、43)

2区の南側で検出した。ピット等を切り、SC-023に切られる。南側は調査区外で全体の規模は不明だが、直径4.2m程度の円形平面を呈する。床面は遺構検出面から深さ約20cmで検出され、床面からピットを数個検出した。主柱穴は全体を検出していないので不明である。

出土遺物

覆土から弥生土器の細片がビニール袋1袋程度出土したが、いずれも図化に耐えない。この他に、漁鐘が出土している。

出土遺物と遺構の切り合い関係から、SC-021は弥生時代後期初頭には廃絶していたと推定される。

SC-022 (図41右、39、40)

2区の南西側で検出した。SC-023と試掘トレンチに切られる。南側と西側は調査区外であり、全体の規模は不明であるが、東西4m以上、南北3m以上を測る隅丸方形もしくは長方形平面を呈すると推測される。床面は、遺構検出面から深さ10~20cmで検出され、床面からピットを数個検出した。中央部が試掘時のトレンチで搅乱されており、主柱穴の状況は不明である。

出土遺物 (図33~35)

覆土から弥生土器片がコンテナケース1箱分出土した。77は粗製器台で底径9.0cmを測る。器壁が厚く焼成不良で、内器面が剥落する。79は甕の底部片で底径7.8cmを測る。外器面に縦方向の刷毛目が施される。80は高环の脚部片で、底径17.1cmを測る。外器面には縦方向の刷毛痕が認められるが、風化が著しい。内器面には下半に指頭圧痕と横方向の刷毛目が施され、奥部に絞り痕がある。胎土が粗く

白色粗砂、茶褐色焼土細粒を多く含む。82~88は甕の口縁部片で、口径は26.6~30.6cmに復元される。89は鉢片で口径22.4cmに復元される。90、91は砂岩製の穿孔具で、前者は一部欠損する。高さは順に6.1cm、4.8cmを測る。錐先部に稜が残る。端部には使用痕と考えられる微細剥離が認められる。94は滑石製石斧片と考えられる。鑿状工具によると考えられる加工痕が認められる。102、103は砂岩製の砥石で、それぞれ1面に使用痕が確認できる。100には溝状の凹みが入り、中央に稜が認められる。

出土遺物から、SC-022は弥生時代中期中葉には廃絶していたと推定される。

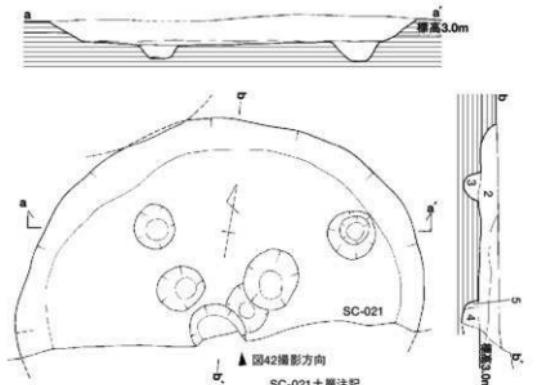
SC-023 (図41下、44、45)

2区の西側で検出した。SC-021、022、034を切る。全体を検出できた。直径4.8~5.0mの正円に近い平面形を呈する。床面は、遺構検出面から深さ20cmで検出され、床面からピットを多数検出した。住居址の中央に2本1対の柱穴列が3列並んでおり、それぞれ上部に梁を架け、各列を繋ぐ桁が架けられたものと推定される。梁行は1間で、芯々距離1.1m、桁行は2間で、2.8~3.0mを測る。また、外側の梁行を取り込んでピットが環状に7個並び、小屋組架構の補助用材の可能性が考えられる。

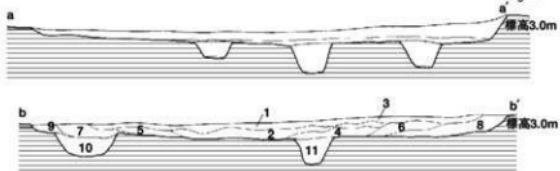
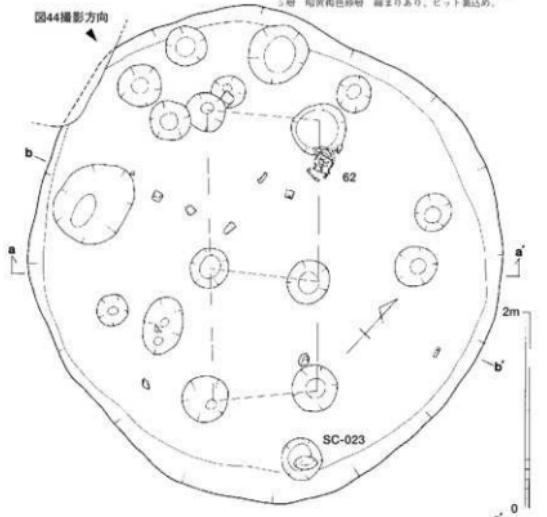
出土遺物 (図32、34)

覆土から弥生土器片等がコンテナケース1箱分出土した。61は鉢で口径15.0cmに復元される。外器面には縦方向の刷毛目、内器面にはナデの後、口縁部に横ナデが施される。62は須玖Ⅱ式新相の甕で、器高24.4cm、口径17.2cm、頸部径14.9cm、胴部最大径21.0cm、底径10.8cmを測る。外器面には細かい縦方向の刷毛目、内器面にはナデが施される。口縁部は横ナデされる。胎土はやや粗く白色粗砂を多く含む。色調は黄みの橙褐色を呈し、内・外器面に使用痕の煤が付着する。床面直上から出土した。95は石斧片で残存長9.2cm、幅5.2cmを測る。全体に叩打痕があり片側の先端部を中心に刃部を研ぎ出す。端部には使用痕と考えられる微細剥離が観察される。石材は閃緑岩であろうか。

出土遺物から、SC-023は弥生時代後期初頭の所産と考えられる。



SC-021土層注記
1層 喀那色砂層 線まりあり、混入物なし。
2層 喀茶褐色砂層 線まりあり、混入物なし。
3層 喀黃褐色砂層 線まりあり、混入物なし、ビット。
4層 喀茶褐色砂層 線まりあり、混入物なし、柱根。
5層 喀黃褐色砂層 線まりあり、ビット奥込め。



SC-023土層注記
1層 黒褐色砂層 線まりあり、有機質富合土層。
2層 喀黃褐色砂層 線まりあり、黄褐色砂ブロック含む。
3層 黑褐色砂層 線まりあり。
4層 黑褐色砂層 線まりあり。
5層 黑褐色砂層 4層に準ず。
6層 黑褐色砂層 線まりあり、喀黃褐色砂ブロック含む。

7層 喀那色砂層 線まりあり。
8層 喀茶褐色砂層 線まりあり。
9層 喀褐色砂層 線まりあり。
10層 喀茶褐色砂層 線まりあり、ビット覆土。
11層 喀茶褐色砂層 線まりあり、ビット覆土。

図41 SC-021、023実測図（縮尺1/50）



図42 SC-021検出状況（南から）



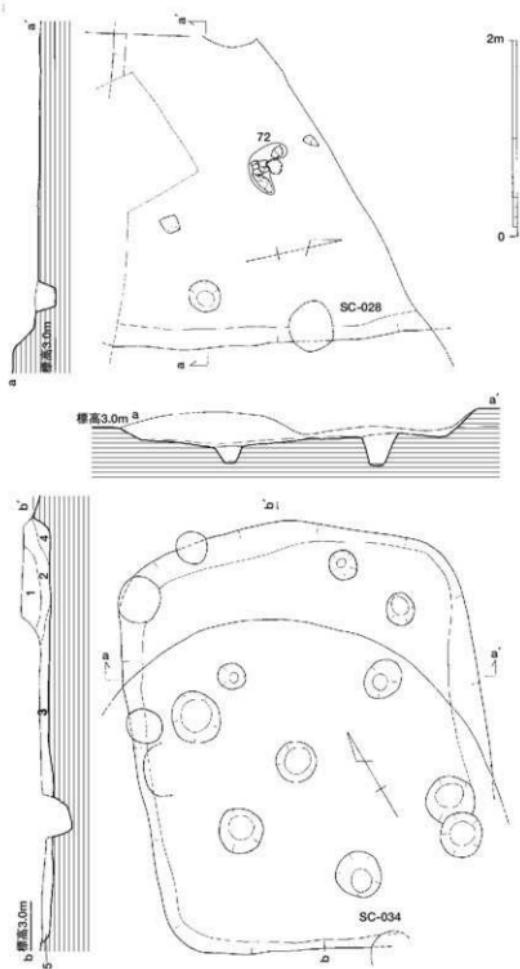
図43 SC-021石錐出土状況（北から）



図44 SC-023検出状況（西から）



図45 SC-023遺物出土状況（東から）



SC-034土質注記

- 1号 砂褐色砂岩 縫まりあり。混入物なし。
- 2号 砂茶褐色砂岩 縫まりあり。混入物なし。
- 3号 砂黄褐色砂岩 縫まりあり。培養土砂ブロック含む。
- 4号 茶褐色砂岩 縫まりあり。混入物なし。
- 5号 砂黄褐色砂岩 縫まりあり。培養土砂ブロック含む。色調や不明い。

図46 SC-028、034実測図（縮尺1/50）

SC-028 (図46上)

2区の北側で検出した。SC-017、020と試掘トレンチ、及び搅乱に切られる。北半は調査区外に延びており、全体の規模は不明であるが、南北の一辺が3.3m以上を測る隅丸方形もしくは長方形平面を呈すると推測される。床面は、遺構検出面から深さ約20cmで検出され、床面からピットを1個検出した。主柱穴の状況は不明である。

出土遺物

覆土から弥生土器の細片等がビニール袋1袋分出土したが、図化に耐えない。

出土遺物と遺構の切り合い関係から、SC-028は弥生時代中期中葉には廃絶していたと推定される。

SC-034 (図46下)

2区の中央より東側で検出した。SC-023に切られる。短辺3.6m、長辺4.3mの隅丸長方形平面を呈し、下端での占有面積は12.5m²程度である。床面は遺構検出面から深さ約20cmで検出された。床面からピットを数個検出した。住居址のほぼ中央で梁・桁共に1.5m間隔で並ぶピットが検出された。主柱穴の可能性が考えられるが、南側の隅でピットが検出されてもおらず断定できない。

出土遺物 (図35)

覆土から弥生土器の細片がビニール袋1袋程度出土したが、いずれも図化に耐えない。97、98は砂岩製の砥石で、長さは順に3.2cm、3.6cmを測る。各5面使用し非常に小さく磨滅しており、手持ち用と考えられる。

出土遺物と遺構の切り合い関係から、SC-034は弥生時代後期初頭には廃絶していたと推定される。

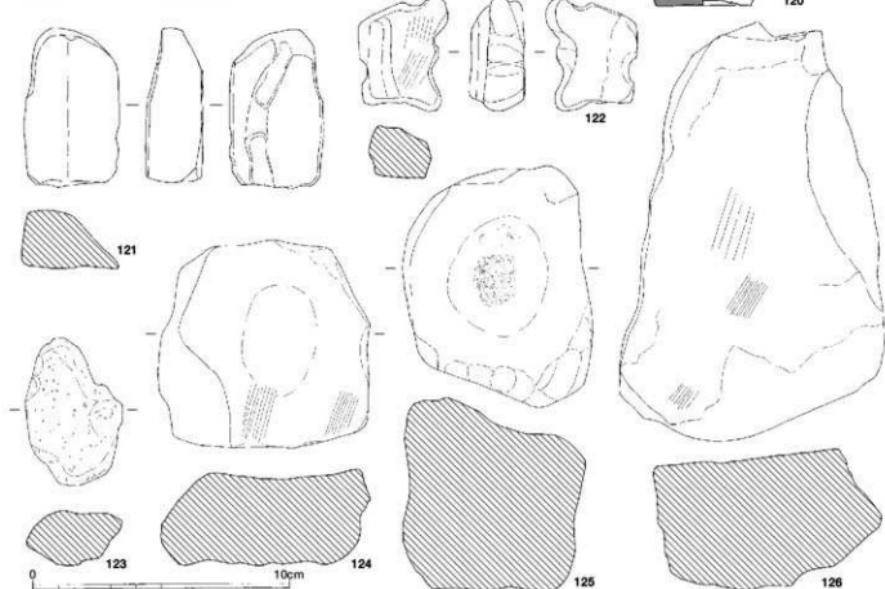
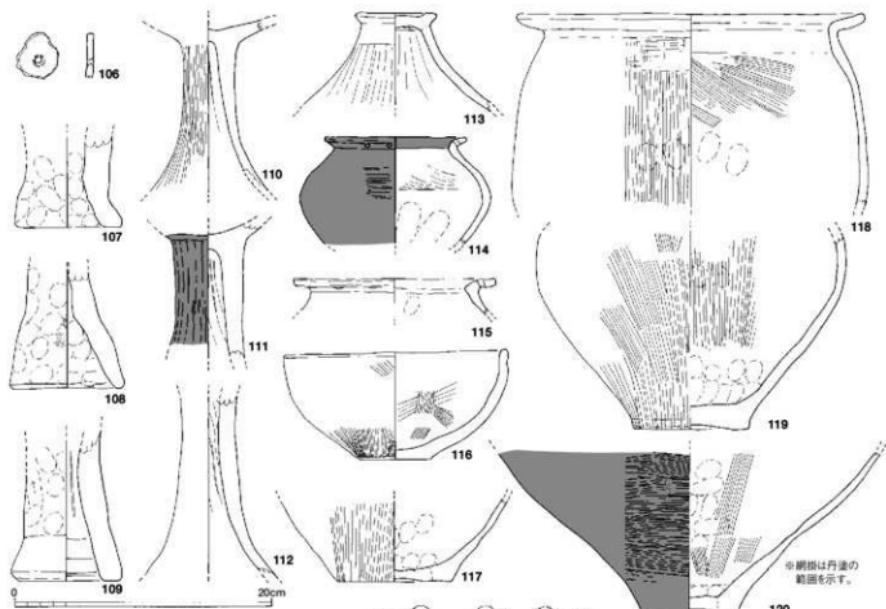


図47 2区包含層出土遺物実測図 (縮尺1/4、1/2)

2) その他の遺構と包含層中の遺物(図47)

SX-019 (図30)

2区南東角で検出した。SC-018、SE-035、SK-036、SX-037に切られ遺構の全容は不明である。出土遺物(図34)

96は滑石製有孔石錐で、直徑12.8~12.9cm、高さ8.1cmを測る。中心に穿孔され、最大孔径6.0cmを測る。

遺構の切り合い関係から、SX-019は弥生時代中期中頃以前の所産と考えられる。

包含層中の遺物(図35、47)

包含層中から弥生土器片がコンテナケース8箱分出土した。105は砂岩製の穿孔具で高さ5.6cmを測る。錐先部断面が円形を呈し、端部に微細剝離が認められる。使用痕と考えられる。107は器面の両側から穿孔した弥生土器片である。孔径0.4~0.5cm。107~109は粗製器台片で底径8.4~8.8cm。内・外器面共に指頭圧痕が確認される。110~112は高环の脚部片。114は壺で口径11.0cm、胸部最大径14.8cmに復元される。外器面は摩滅が激しい。内器面にはナデ、口縁部には横ナデが施される。口縁部2箇所に穿孔され、孔径は0.3cm。口縁部から外器面にかけて丹が塗布される。115は壺の口縁部片で、2箇所に穿孔される。口径15.6cmに復元される。116は鉢で高さ8.5cm、口径17.4cm、底径5.7cmを測る。117、118は甕片、119、120は壺片で120は外器面に丹塗磨研される。121、122、124、126は砂岩製砥石。123は輕石。125は磨石である。

3 近世・近代の遺物

(1) 高取焼関連遺物

高取焼に関係する遺物は、包含層のすき取り時にコンテナケース2箱程度採集した。調査地点より東に約100m付近が東畠山推定地である。窯道具では、サヤ、トチン、ハマが出土している。127は上部が欠損する花瓶で残存高24.6cm、底径12.6cmを測る。裾部が喇叭状に開く。底部には低い「コ」字形の高

められ、使用痕と考えられる。107は器面の両側から穿孔した弥生土器片である。孔径0.4~0.5cm。

107~109は粗製器台片で底径8.4~8.8cm。内・外器面共に指頭圧痕が確認される。110~112は高環の脚部片。114は壺で口径11.0cm、胸部最大径14.8cmに復元される。外器面は摩滅が激しい。内器面にはナデ、口縁部には横ナデが施される。口縁部2箇所に穿孔され、孔径は0.3cm。口縁部から外器面にかけて丹が塗布される。115は壺の口縁部片で、2箇所に穿孔される。口径15.6cmに復元される。116は鉢で高さ8.5cm、口径17.4cm、底径5.7cmを測る。117、118は甕片、119、120は壺片で120は外器面に丹塗磨研される。121、122、124、126は砂岩製砥石。123は輕石。125は磨石である。

台が鉋状の工具で削り出され、中央部は更に浅く削られる。高台内側に巣銘の刻印がある。頭部に型物の輪環獅子耳が一对貼り付けられている。胎土はきわめて精良で灰黄色を呈す。焼成は良好である。内・外器面に暗褐色に発色する鉄釉を掛けた後、外器面にベージュ色の薺灰釉を雨滴状に掛ける。128~130は小型のトチン、131、132は小型のハマである。いずれも赤褐~暗赤褐色を呈す。

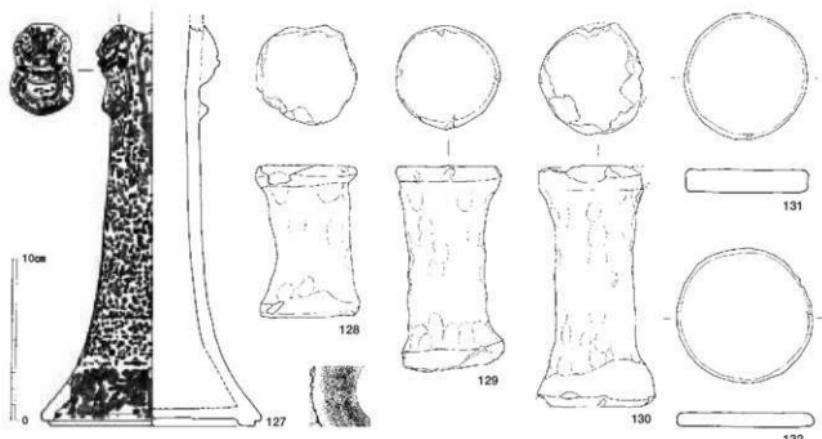


図48 包含層出土高取焼関連遺物実測図(縮尺1/3)

4 小 結

今回調査した西新町遺跡第16次調査地点では漁撈具やその生産に関連する遺物が比較的多く出土した。また弥生時代中期中葉のSC-017竪穴住居址では、土器片直下の覆土から孔のあいていないトンボ玉が1点出土した。現今のところ、国内にその類例がなく比較検討できないが、若干の所見を述べて小結に代えたい。

(1) 検出遺構と石器生産関連遺物

今回の調査では、東側に位置する第8・9次調査に統いて弥生時代中期の集落址を検出した。これまでの発掘成果でいえば、西新町遺跡における弥生時代の集落は本調査地点を西限としているが、遺構の密度から該期の集落が本地点より更に西側に展開しているものと予想される。

弥生時代の遺構は、竪穴住居址22棟分、土壙、ピット等である。住居址の内訳は、20棟が方形で2棟が円形である。墓地遺構は9次地点同様、確認されなかった。円形住居址は2棟のみで、切り合い関係から方形住居址に後出し、出土遺物から後期初頭に属すると考えられる。方形住居址は全て中期中葉から後葉の所産と考えられ、方形住居→円形住居という変遷が追える。8次調査地点では円形住居址が1棟のみ検出され、中期後半一末に比定される。また、9次調査地点では中期後半一末の住居址を12棟検出し、やや大型の1棟のみが円形である他は方形である。このように西新町遺跡では中期中葉には方形住居が盛行し、後葉から末に円形住居が採用され始め、後期には――類例が少なく断定できないが

――円形住居に変遷したことが推定される。

出土遺物でも、8・9次調査と同様に漁撈具や砂岩製砥石などその生産に関連する遺物が比較的多数出土した。特にSC-010では滑石剥片が床面付近から多量に出土しており、滑石製漁撈具の生産工房だった可能性がある。砂岩製砥石や穿孔具もSC-003、018、020、022、034など複数の住居址で出土しており、その生産に何らかの関係を持っていたと推測される。また、荒削・調製剝離・穿孔・研磨など一連の製作工程をこれらの住居がそれぞれ分業していたのか、それとも同一の住居址でなされていたのかは今後の検討課題である。

西新町遺跡より約3km西に位置する姪浜遺跡第3次調査地点では、弥生前末期～後期の集落を検出し、漁撈具等が多く出土した。また漢式三翼鐵・半島系無文上器・南海產貝製腕輪未製品等を始め、対外交渉を物語る遺物が少なからず出土しており、西新町遺跡と類似した性格が看取される。本調査地点出土のトンボ玉等も含め、博多湾岸の諸遺跡にもたらされた文物の流入経路を明らかにすること、また対外交渉にこれら集落民がどのような役割を担っていたかを解明することが大きな課題といえる。

表1 弥生時代各住居址一覧表

遺構番号	地点	平面形	時期	規模 (m)	主な出土遺物
SC-001	11K	隅丸長方形	中期後葉	3.3×4.0	弥生土器（鍬先状口縁）
SC-002	11K	（隅丸方形）	中期		弥生土器（鍬先状口縁）
SC-003	11K	（隅丸方形）	中期		弥生土器（鍬先状口縁） 砂岩製砥石
SC-004	11K	（隅丸方形）	中期	3.3×	弥生土器（鍬先状口縁）
SC-005	11K	隅丸長方形	中期	2.8×3.4	弥生土器（鍬先状口縁） 玄武岩製磨石
SC-006	11K	（隅丸方形）	中期中葉		弥生土器（鍬先状口縁） 不明石製品
SC-007	11K	（隅丸方形）	中期中葉		弥生土器（鍬先状口縁）
SC-008	11K	（隅丸方形）	中期中葉		弥生土器片
SC-009	11K	隅丸長方形	中期後葉	3.1×4.2	弥生土器（鍬先状口縁） 土製投彈
SC-010	11K	（隅丸方形）	中期後葉	4.4×	弥生土器（鍬先状口縁） 滑石製剥片 玄武岩製石斧未製品
SC-011	11K	隅丸長方形	中期中葉		弥生土器（鍬先状口縁）
SC-012	11K	（隅丸方形）	中期中葉		弥生土器（鍬先状口縁）
SC-013	11K	隅丸長方形	中期中葉	3.7×	弥生土器（鍬先状口縁） 不明鉄製品
SC-016	2K	隅丸長方形	中期後葉	5.1×	弥生土器（鍬先状口縁） 「く」字状口縁
SC-017	2K	隅丸長方形	中期中葉	3.2×4.3 a	弥生土器（鍬先状口縁） トンボ玉
SC-018	2K	隅丸長方形	中期中葉	3.5 a × 5.1 a	弥生土器片 滑石製漁網未製品 砂岩製砥石
SC-020	2K	（隅丸方形）	中期後葉	4.1×	弥生土器（「く」字状口縁） 砂岩製砥石
SC-021	2K	円形	後期初期	4.2（直径）	弥生土器片 漁網
SC-022	2K	（隅丸方形）	中期中葉		弥生土器片 砂岩製穿孔具 滑石製石斧 砂岩製砥石
SC-023	2K	円形	後期初期	5.0（直径）	弥生土器片 「く」字状口縁 石斧
SC-028	2K	（隅丸方形）	中期中葉		弥生土器片
SC-034	2K	隅丸長方形	後期初期	3.6×4.3	弥生土器片 砂岩製砥石

() は推定

(2) SC-017 穫穴住居址出土のトンボ玉

トンボ玉が出土したSC-017 穫穴住居址は、短辺3.2m、長辺4.3m以上の平面隅丸長方形を呈する。遺物はいずれも床面からやや浮いた状態で出土しており、住居の廃絶後に埋没したものと推定される。出土した土器から同住居址は、弥生時代中期中葉には廃絶していたと推定される。

トンボ玉は住居址の北辺付近に埋没していた甕片の直下から出土した。遺物出土状況図作成後、同甕片を取上げた際に青白いガラス製品が僅かに確認できた。その時点で出土状況写真を撮影するべきであったが、迂闊にも玉に被っていた砂を払い除けて撮影したので、図版に使用したものは玉が露出している。但し、出土位置は原位置である。また、周辺には搅乱やモグラ等の小動物による穴等もなく、覆土の状態は非常に綺麗であった。故にトンボ玉の出土位置は、住居址が埋没した時期の状況を留めているものと考えられる。

トンボ玉は直径1.75cmを測り、孔がない。製作技法は、透明紺青と不透明白色の2色のガラスを束ねて溶解させて引き伸ばし、芯棒の先端に螺旋状に左回りに巻き付け、その後芯棒を抜き取り再加熱して痕を閉じたと考えられる。透明部分の外観の限り、内部に白色と紺青のガラスを数層確認できるので、巻き付けを数回繰り返して徐々に玉を大きくして成形したものと考えられる。巻き終わりは、玉の下方

から上端部に向かって巻き上げているように見受けられる。白色と紺青のガラスが同時に動いていることから、この2色が1単位になっていることが理解できる。但し巻き終わり部分の紺青ガラスの周囲は白色ガラスと混ざった結果であろうか、色調がスマート（明るい紫みの青）を呈する部分が多い。巻き付け後、棒状工具を抜き取るが、顕微鏡写真によつて観察された上端部の色ガラスや気泡の動きから、工具を僅かに回転させながら玉から抜き取ったものと考えられる。また、玉の上端には棒状工具を抜き取った痕を再加熱して鍛状の工具で押された痕跡が肉眼でも観察できる。また、透過エックス線写真観察を行つたところ、玉内部の上端部寄りにやや大きめの気泡が確認され、製作時に抜き取った棒状工具の痕跡と考えられる。

玉はソーダ石灰ガラスで、カリウムを含むことから、ヨーロッパ・エジプト・シリア産ではないと考えられる。またアルミナを約10%含むことから、インド・東南アジア産の可能性が考えられる。銅の含有量が紺青を発色するには足りず、微量ながらコバルトが含まれており、その発色源と考えられる。

孔のあいていない古代のガラス玉の類例は、これまでのところ管見の限り非常に少ないと考えられる。ナイル川の中・下流域に位置する現スーザン・オクシリッシュ（Oxyrhynchus）遺跡（B.C4世紀～）出土のトンボ玉（大英博物館所蔵、収蔵番号GR1976.11-2, 1-3）は、黒色と白色の2色のガラスを使用

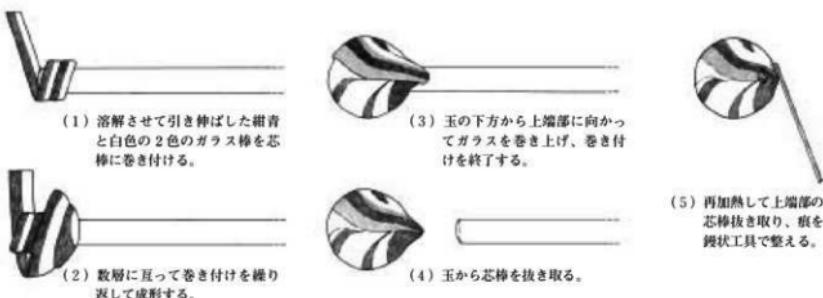


図49 トンボ玉製作工程復元

表2 トンボ玉成分分析表

Elem.	Net	Wt%	At%	Error	BG
NaK	5.28	17.38	21.54	2.87	1.6
AlK	38.97	10.19	10.76	0.95	2.12
SiK	556.61	53.79	54.56	0.25	2.33
KK	141.11	5.6	4.08	0.49	4.49
CaK	377.54	12.14	8.63	0.3	4.99
MnK	21.93	0.26	0.13	1.44	7.8
FeK	34.53	0.41	0.21	1.1	8.49
CuK	0.81	0.01	0	22.97	9.66
ZnK	4.32	0.04	0.02	4.98	9.55
AsK	20.07	0.19	0.07	1.53	8.17
Total		100	100		

白色部分

Elem.	Net	Wt%	At%	Error	BG
NaK	4.48	16.91	21.07	3.24	1.84
AlK	32.49	9.63	10.22	1.05	2.34
SiK	495.36	53.84	54.9	0.26	2.53
KK	111.63	4.99	3.66	0.56	4.36
CaK	371.15	13.4	9.57	0.3	4.72
MnK	23.96	0.32	0.17	1.34	6.99
FeK	34.27	0.46	0.24	1.09	7.58
CuK	4.7	0.05	0.02	4.63	9.54
ZnK	3.88	0.04	0.02	5.47	9.6
AsK	32.45	0.35	0.13	1.13	7.85
Total		100	100		

青色部分

し、同様の製作技法によるものとの指摘を受けた^①。大英博が付与したこの玉の大まかな年代は紀元1世紀であるが、オクシリンチュス遺跡は紀元前4世紀から経営されており、玉の年代が遡る可能性も考えられる。このトンボ玉は、ソリティアという盤上で玉を動かして遊ぶ玩具の駒と考えられている。但し、西新町遺跡出土のトンボ玉がどのように使用されていたかは不明である。

近年、北部九州の遺跡で出土する弥生時代のガラス製品の中に、酸化アルミニウム含有量の多いソーダ石灰ガラスが含まれていることが明らかになっていている。福岡市内の例では、南八幡遺跡第9次調査5号住居址^②、及び今宿五郎江遺跡第4次調査包含層から出土した赤色不透明の管玉等がある。これらはインドネシアでムチサラ(mutisalah)と呼称されるソーダ石灰ガラスと同じ成分組成を示す。これが大量に出土した南インドのローマ人居住地のひとつ、アリカメドウ(Arikamedu)遺跡では、紀元前3世紀頃から後3世紀までガラス生産と製品製作が存続しており、これらの製品が各地を経由しながら海路、北部九州へもたらされたと推定されており^③、広範な地域から弥生時代ガラスが伝播していたことが明らかにされつつある。

本トンボ玉がどのような経路を辿って西新町遺跡にもたらされたのか、現段階では比較検討の資料がなく不明であるが、先述したようにインド・東南アジア産である可能性が指摘されており、このような流れの中で招来された可能性も考えられるが、現今のことろ推測の域を出ない。

日本国内における弥生時代のトンボ玉出土例としては、中期前葉に比定される長崎県壱岐市・原の辻大原遺跡の3号甕棺墓出土の4点がある。いずれも巻き技法による単品製作で、直径9mm前後、孔径4.5mm前後を測る。本体は青色で、白色の二重構造円文と円点文が加飾されており、中国から流入した小型トンボ玉と考えられている^④。本調査で出土したトンボ玉の年代は、出土した土器の年代観から、弥生時代中期中葉(須玖II式)には住居址が廃絶していたと考えられ、概ね該期に位置付けられよう。トンボ玉としては最古級、孔のあいていないトンボ玉としては現今のところ国内最古例である。

註

- (1) 共立女子大学の谷一尚教授の御指摘による。成分分析は比佐陽一郎氏、片多雅樹氏(福岡市埋蔵文化財センター)に依頼した。また、井上暁子氏(東海大学)、小寺智津子氏(東京大学院生)、真藤洋子氏(中近東文化センター)には多くの御教示を頂いた。
- (2) 比佐陽一郎・片多雅樹・北村幸子・肥塚隆保「南八幡遺跡9次調査出土ガラス及び暗赤色小塊物質の保存科学的調査」『南八幡遺跡5』福岡市埋蔵文化財調査報告書第641集 2000
- (3) 肥塚隆保「古代の宝石“ガラス”をめぐる国際交流」『2002年度文化財科学会公開講演会資料』2002 日本文部科学省
- (4) 藤田等「弥生時代ガラスの研究」150~151頁 1994 名著出版。

参考文献

- 谷一尚 ガラスの考古学 1999 同成社
由水常雄 トンボ玉 1989 平凡社

報告書抄録

ふりがな	にしじんまちいせきはち						
書名	西新町遺跡8						
副書名	西新町遺跡第16次調査報告書						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第846集						
編著者名	松浦一之介						
発行機関	福岡市教育委員会						
発行年月日	福岡市中央区天神一丁目8番1号 電話 092-711-4667 平成17(西暦2005年)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
西新町遺跡16次	福岡県福岡市 早良区高取一丁目	40131		33° 34° 42°	130° 21° 21°	2003 05 28 ~ 2003 08 12	348 共同住宅建設
所収遺跡名	種別	種別	主な遺構	主な遺物		特記事項	
西新町遺跡	集落	脊生	竪穴住居 土塙 ピット	弥生土器(壺・甕・高杯・鉢)、滑石製漁鐘、 滑石削片、滑石製漁鐘未製品、滑石製石斧、 砂岩製砥石、砂岩製穿孔具、玄武岩製鐘石器、 玄武岩製石斧未製品、鐵製品(鍛造鐵斧片)、 トンボ玉		弥生時代中期から後期にかけての集落遺跡。漁労具やその未製品が多く出土し、工房址と考えられる。 国内最古のトンボ玉出土。	

Nishijinmachi Site8

The Report of The Research of Cultural Properties Fukuoka City Vol 846

31 March, 2005

© Fukuoka City Board of Education

Fukuoka City Board of Education

1-8-1 Tenjin Chuo-Ku Fukuoka City, JAPAN

Edited and Published by Burial Cultural Properties Section

of Fukuoka City Board of Education

Printed by Showa Printing co.ltd

No parts of this publication can be reproduced or copied by any means
without prior permission of this copyright owner.

西新町遺跡8

福岡市埋蔵文化財調査報告書第846集

平成17年3月31日

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8番1号

印 刷 (有)昭和印刷

福岡市中央区草香江一丁目8番10号

NISHIJINMACHI 8

The Report of Archaeological Excavation
at Nishijinmachi site; No 16
in Fukuoka City, JAPAN

The Report of the Research of Burial Cultural Properties Fukuoka City
Vol 846



March, 2005
Fukuoka City
The Board of Education